

その先まだまだ続くよ

CREATURE 12 mnfikmyhk **MIXING**

春屋アロヅ
川鶴 鶴肋
Fukapoon
なぎ

CONTENTS

お迎え	春屋アロヅ	02
鬼神を継ぐもの	川鶴鶴肋	04
切り札はキュートなあなた	Fukapon	55
受注残の多いデータセンター	なぎ	58
締め切りを知るモノたち		60

転落
mnfikmyhk
CREATURE MIXING 12

お迎え

春屋アロヅ

食卓では美紀の父がワイシャツ姿で食パンをかじっていた。美紀はもちろん、兄の浩太も姿が見えない。

「おはようございます。ご無沙汰します」

「ああ、雅ちゃん。おはよう。悪いね、わざわざ来てもらって」

「いえ、私が言い出したことですから」

普通、友人の父親に会う機会はなかなかないが、土日に遊びに来て顔を合わせたことも少なくないし、美紀と一緒に旅行に連れて行つてもらったことがあって、雅にしてみたら親戚のおじさんのような感覚だ。食卓に座るにも気後れしない。

母が出してくれたコーヒーを口にして、「浩太さんは?」と尋ねると、

「今日は午後からって言つたから、しばらく起きないとと思うわ」との答え。大学生だから授業の始まりも終わりも日によってまちまちなのだろう。美紀もそうだが浩太も朝が弱くて、必要がなければ昼前までは寝ているらしい。

テレビの朝のニュースをBGMにしばらく話しながら待つていると、コッ、コッ、コッ、と耳慣れない音が階段の方から聞こえてきた。

「ああ、ようやく起きてきたな。美紀、お前いつもより時間がかかるんだからもっと早く起きないと間に合わないだろう」「大丈夫だって。あ、雅。おはよ」

「おはよう」

「おはようござります」

「おはよう。久し振りねー。あの子、そろそろ起きたと思うから、中で待つてて」

「お邪魔します」

いつもはこの家に来るとまっすぐ美紀の部屋か美紀の兄の部屋に行つたものだが、今日は美紀の母にくつついて居間に行つた。

「いい。別に早起きしてゐわけじゃないしな。それより、早く食

左足には黒いサポーターをしている。

冬もまつただ中のある月曜日の朝。雅はいつもより三十分ほど早く家を出た。二つ隣の駅で降りると、辺りを見回しながら改札を抜けた。ほとんどの人が駅に向かって歩く中を、流れに逆らつて進む。歩道が広めなのと雅自身が背が高いので、視覚的な違和感はあっても進むに支障はない。

十分ほど歩いて、一軒の家の前で足を止めた。以前は何度となく来ていたが、最近は美紀が雅の家に来ることがほとんどで、美紀の家にはめっきり来なくなつた。呼び鈴を鳴らすと、それでも耳慣れた音が鳴る。

「保土ヶ谷です。美紀を迎えてきました」

「あら雅ちゃん? ちょっと待つてねー!」

出たのは美紀の母親だ。待てと言われてはいるが、玄関まで進む。と、ほどなくパタパタと足音がして、ドアが開いた。長身の二人の親にしては小柄な彼女は、雅を見上げて嬉しそうに微笑んだ。

「おはようございます」

「おはよう。久し振りねー。あの子、そろそろ起きたと思うから、中で待つてて」

「お邪魔します」

いつもはこの家に来るとまっすぐ美紀の部屋か美紀の兄の部屋に行つたものだが、今日は美紀の母にくつついて居間に行つた。

べて出ないと間に合わないぞ」

雅にも促されて、美紀は雅が引いた椅子に浅く座ると、自分のトーストに手を伸ばした。

「あれ、雅か？」

名前を呼ばれて振り返ると、美紀の兄、浩太が居間をのぞいていた。こちらはまだ起き抜けと見えて、Tシャツにスウェット姿、おまけに寝癖も派手についている。

「おはようございます。美紀が不便だろうと思って迎えに」

「マジですか。そのアホの自業自得だってのに優しーなお前」
気にせず食べていた美紀も、聞き捨てならないとばかりに振り返った。

「誰がアホだボケ兄貴」

「お前以外に誰がいるってんだよ。ライブやつてる途中にステー

ジから落ちて捻挫とか聞いたことねーよ」

美紀はぐっと言葉に詰まって、ぶいと前を向くと、残ったトーストを思い切り口に詰め込んだ。

「浩太、そんなだらしない格好で人前に出てくるな。顔洗つてきなさい」

「いいへい、と適当に応えて浩太は出て行き、美紀の父はすまないね、と雅に謝った。

「うし、行くか」

「ああ」

美紀が立ち上がるのを見て、邪魔にならないよう椅子を引いてやった。コツコツと居間を出る美紀の後について出る、その前に振り返って、美紀の両親に「お邪魔しました」と声をかけた。美紀の父はにっこり笑って「行ってらっしゃい」と答えた。

靴をはいでいる美紀の隣で、玄関先に置いてあつたかばんを持つと、美紀の横で靴をはいて先にドアを開けて待つ。

「じゃー行つてくる」

「行つてらっしゃい。雅ちゃん、よろしくね」

「はい。行つてきます」

母親に玄関まで見送られて家を出る。さっきは十分ほどかけて

歩いてきた道を、ゆっくり歩く。

「まだ痛むか?」

「んー、そこそこ痛え。ぶつけたりしたら地獄だし」

「そうか……」

「ま、しばらくは我慢するしかねーし、そんな顔すんなよ」
痛みはどうにもならない、とわかつて落胆したのが顔に出でしまったらしい。

「荷物持つてくれたりするだけですげー助かるんだから」

そう言ってにかっと笑う。これではどちらが怪我人なんだかわからない。

「こんなことくらい何でもないよ」

鬼神を継ぐもの

川鶴鶴助

は別の意味でお志摩さんの後継者だろうな。

新川詩紀

珠大附属紫城高二年生。七夏の婚約者。斗流十家第一位新川家の養女。双子の妹である美紀と二つの魂で身体を共用するデュアルコアにして、ドゥーベの星鬼『樞』憑き。偶然を司る女神二連精魂にして、ドゥーベの星鬼『樞』憑き。偶然を司る女神『白銀珠比女命』の称号を持ち、事実上の斗流次期宗家として扱われている。

篤史注：She is Providence. 七夏以上にチート。俺の義妹がなぜか大魔王さま。詩紀は微妙にクーデレ風味で美紀は微妙にツンデレ風味とは七夏の弁だが、はつきり言って区別つかんね。

新川篤史

珠大附属紫城高二年生。斗流十家第一位新川家の長男、詩紀の義理の兄。鬼斬り。アリオトの星鬼『衝』を好んで使う。

篤史注：俺のこと。どうでもいいや。とにかく本編を読め。

遠野結香

珠大附属紫城高二年生。斗流十家第十位遠野家の最後の生き残りにして篤史の婚約者。メグレズの星鬼『権』憑き。篤史は子供の頃のあだ名で『ゆつか』と呼ぶ。

篤史注：ノーコメント。断じてノーコメント。

五ヶ瀬七夏

通称ナナ。珠大附属紫城高二年生。男子。斗流十家第五位五ヶ瀬本家の長男。星鬼『九州珠口』憑き。

宮藤初

珠大附属紫城高二年生。斗流十家第九位宮藤家の娘。フォーマルハウトの星鬼『北落師門』を左腕に宿す。

篤史注…御庭番メイド姉。性格はジャステイス寄り。格闘戦は打撃寄り。

宮藤終くどうつい

珠大附属紫城高三年生。双子の姉である終と共有する形で、右腕に『北落師門』を宿す。

篤史注…御庭番メイド妹。性格はフリーダム寄り。格闘戦はサブミッション寄り。

七瀬撫菜ななせひなな

珠大附属紫城高一年生。斗流十家第七位七瀬家の娘。通称ベンペン。右目に『弧矢』がいてるが、普段は眼帯着用。

篤史注…不思議ちゃん。ゴルゴと言うか、むしろサイトーかな。なずなイコールベンベン草ね、念のため。

七瀬鈴菜ななせすずな

珠大附属紫城高一年生。ベンベンの双子の妹。通称リンリン。『斧鉄』憑き。

篤史注…アホの子。突撃隊長。のけぞり無効&常時全身攻撃判定。黒旋風李達みたいな立ち位置だな。

新川さおりあらかわ

珠大附属紫城高の教諭。詩紀や篤史の従姉にして担任。『ハートの女王』『鬼婆』といつた異名を持つ。同盟関係にあるベネットナシユの星鬼『搖』に身体を貸し、珠坂商工会議所会頭『四三搖子』なる架空の人物を名乗らせる事あり。

篤史注…鬼の力を使わずに鬼を圧倒できる、生きた理不尽。お志摩さん亡き今、珠坂の真の支配者。この人が一目も二目も置くアリストってのは一体どんなバケモノやら。

陸奥十悟むつとうご

珠大附属紫城高の教諭。ジユウ兄と呼ばれることも。斗流十家第六位陸奥家の次期当主。さおりの同級生。星鬼『巻舌』の使役を得意とする。

篤史注…基本的に文系で格闘には不向きなのは名前負けの、頼りになるようなならないような兄貴分だ。俺たちさおり姉被害者同盟の代表でもある。

芳村黒男よしむらくろお

斗流内部爾清部隊『檣』の司令。表向きは銀行員。四三家傍流の出身。睡蓮の父親。

篤史注…嫁さん亡くしてすぐに若くて綺麗なお姉さんと再婚した罰当たりなおっさんだが、尊敬にたる鬼斬りの中の鬼斬りの人もある。だがやっぱり許せんなあ。

芳村志摩よしむらしま

旧姓後藤。通称お志摩さん。黒男の前妻。睡蓮の母親。故人。

矢車の再来と詠われたマジックアイテム制作の天才。死してなお斗流に強い影響を残している。

篤史注…さおり姉をあんな風に育て上げた戦犯の一人だな。いまだに何かあるたび、彼女作のアイテムが「こういう事もあるうかと」ばかりに登場してくる。未来予知してたとしか思えん。

芳村玲韻

旧姓四三。黒男の妻。レーヴアテインのクロヒメ。商工会会頭

秘書として珠坂経済界を実質支配する。

篤史注・さおり姉とならび、絶対に逆らっちゃいけないお姉さんの一人だ。彼女達クロヒメは剣の精霊としての性質を持ち、鬼使いでも鬼憑きでも呪術でもない固有の特異能力を備えている。敵じやなくて良かつたとつくづく思うね。

竜胆大輔

珠大附属紫城高一年生。斗流十家第六位陸奥家傍系竜胆家の長男。星鬼『尚書』憑き。他人とは異なる歴史を記憶しているため前世系中二病をこじらせており、陸奥家からは長らく恥部扱いされ半軟禁状態とされていた。

篤史注・リ○デ○ング＝シ○タ○ナームみたいもんだが……本人にもどこまで妄想なのか正確にわからんのだそうな。あれで悪いやつじやないんだが、全面的に信用しちゃって大丈夫かはちと疑問だな。

芳村睡蓮

珠大附属紫城高一年生。ダンスレイフのクロヒメ。大輔の『相棒』。

篤史注・ちびでこツンデレ娘。いかにもCV釘○さんつて感じ（笑）。黒男さんとお志摩さんの娘で玲韻さんの弟子、しかもクロヒメという危険人物。あの大輔を操縦できている点だけでも、一筋縄じやいかん人物だつてのは間違いないな。

野口紺咲子

珠大附属紫城高二年A組担任。担当教科は現代国語。見た目は美人だが中身はゆるキャラ。

篤史注・俺にとつては甘酸っぱい記憶と残念な現実の象徴などこのかの誰かさんにそつくりな気もするが、気にしない気にしない。

鬼神を継ぐもの

五ヶ瀬七夏が現在直面している状況を説明するには、まずは篤史兄さんについて語らねばならない。

新川篤史さんは、詩紀ちゃんの義理の兄にあたる人物だ。

七夏の一学年上で、宮藤の双子姉妹と同じ歳。成績では文武を問わず人後におちることはない優等生。

百八十センチをこえる長身と引き締まった筋肉質な体つきにくわえて絵に描いたようなハンサムっぷりで、精悍という言葉こそが相応しい。頻繁に女子とまちがえられる七夏には羨ましい限り。紫城高等部一二を争う有名なカップルの片割れと知りつづ秋波を送る女子が少くないのも納得だ。

かつて幼なじみ達が揃ってつるんでいた頃。年の離れた十悟兄さんやさおりさんはあまりにもレベルが違いすぎて張り合う対象にはなりえなかつたが、篤史さんは僕らにとつては近い歳の兄貴分であるだけに、かえってその凄さがわかりやすかつた。

腕力、運動神経、頭の回転、そしてリーダーシップ。単純な能力の点でも他の子供達とは一線を画していたが、ただそれだけではない。子供らしからぬ堂々とした風格を備え、これまた落ち着いた雰囲気の宮藤の双子を部下のように引き連れた（今思えば、実際その通りだったのだが）篤史さんは、子供達の中ではぬきんでたカリスマだった。神童という言葉はある頃の彼のためにあるような言葉だった。

だが篤史兄さんは小学二年の夏、隠居したお爺さんの元へと引つ越していき、翌年には七夏自身も訳あって珠坂を離れる事にな

た。
そして十年ぶりに珠坂で再会した時には、彼は様変わりしていた。

容姿という点ではまさに納得の正常進化で、一目見て彼と確信できたのだが……万事において隙の無かつたあの篤史兄さんが、いかにも俗っぽい雰囲気をまとうようになっていたのには少々幻滅させられたものだ。

軽薄な表情とオタク発言さえ控えれば完璧な快男子だと言うのに、どうしてこんな残念な事になってしまったのか。お爺さんの喜一老のもとで薰陶を受けてきたのではなかつたのだろうか。あるいは、篤史兄さんの飘々とした態度は彼の複雑な立場にも関係しているのかもしれないが。

うちの両親の態度から類推すると、むしろオタクこそがここいらの旧家の英才教育の神髄なのかもしれないなどと邪推してみたりするが、絶対無いとは言い切れないのが怖い。いや、そんなのはどうでもいいか。

篤史さんの劣化っぷりは気にかかつたものの、当時の七夏はそれ以上深入りすることはなかつた。正確に言うならば、そんな些細な事情にかかりずりあつてゐる余裕など彼には無かつた。両親の方針でこの歳まで何一つ事情を知らされてこなかつた七夏は、珠坂帰還直後から世界観がひっくり返るような冒險に幾度となく巻き込まれていたからだ。どこの伝奇系ラノベだとボヤきたくなるようなエピソードがてんこ盛り。どれもこれも出来すぎで、いかにも故芳村志摩さんかさおりさん辺りの仕込みとしか思えなかつたものだが、当のさおりさんはそれこそが珠坂という街だと言つ

て憚らない。

彼女によれば、珠坂は日本列島の靈的防衛陣の中心として設計された街だそうだ。そして、珠坂の主は同時にこの国の闇の半分を支配する者、帝の守護者にして共同統治者であるとみなされているとのこと。そこまで来るとちと眉唾だが、ここ珠坂には斗流十家と呼ばれる旧家群があり、各方面にいまだに強い影響力を残しているのは確かだ。彼らは血脉に封じた鬼の力をもって鬼を行使しつつ、古来より妖魅を討伐し人を制して国を守り続けてきたとされており、その血脉は未だに保たれ続けている。

さっと挙げられるだけでも、黒男さんや玲韻さんの芳村家、十悟兄の陸奥家、撫菜・鈴菜の七瀬家、初・終さんの宮藤家、結香さんの遠野家、それから五ヶ瀬家。本家と分家、正当七家と新三家という差はあっても、いずれも斗流十家に繋がる古い家柄で、鬼使いの血を引いているらしい。

一年前の七夏ならば中二妄想乙と笑い飛ばしてしまっていたであろう内容だが……ここ半年かそこらの間に魔物を討つための特殊技術や人間離れした能力を散々目にしてきたばかりか、かく言う七夏自身にしてからが九州珠口きゅうしゅくしゆくなんてわけのわからない鬼に憑かれてちょっとした魔法使いもどきになってしまっているのだから、否定したくてもできるものではない。

篤史さんは十家筆頭の新川家本家長男。しかも鬼を使う鬼斬りの才能を持つ彼は本来ならば斗流を継いで当然の立場だ。

先代の喜一さんは引退に伴い、斗流宗家の座は現在はさおりさんが代理として預かっている状態であり、次期宗家は最高位の星鬼北斗七鬼のさらに頭たる樞の憑いた詩紀ちゃんということになっている。

詩紀ちゃんはもともとは斗流の中では傍系の出だと言う。

新川家が彼女を養女にとったのは、危険きわまりない樞憑きを管理するために手に届く範囲におくための名目だらうことは想像に難くない。しかも彼女は恐ろしく扱いの難しい娘だ（彼氏の七夏が言うのだから間違いない）。傀儡の御輿に据えてみたとて、誰かが思うように動かせるようなタマではないから、そこまでして横車を押すほどの価値はないだろう。

篤史さんの鬼斬りとしての才能は決して詩紀ちゃんに劣るものではない。七夏の素人目からもそのぐらいはわかる。詩紀ちゃんには悪いが、人物の大きさという点でも篤史さんがだいぶ上だ。篤史さんがどうしようもないポンクラとか言うのならともかく、最も血の濃い第一継承者にこれと言つて目立つた欠点がないのだから、そなうお家騒動が起るような複雑な状況ではない筈だ。では、詩紀ちゃんが宗家ということで誰もが納得しているのはどういう事なのだろうか。篤史さんほどの人物が妹の後塵を拭する立場に甘んじているのも不思議で仕方ない。確かに篤史さんは野心とか表に出すタイプではないが、詩紀ちゃんにあもボロクソに言われてばかりでは、さすがの彼でもカチンと来そうなものだ。

「兄さんは人間レベルの霸気が備わっていないようね。せいぜいカタツムリ程度かしら」

とある日の放課後。幼なじみ達が集まつたときに、詩紀ちゃんが挑発的に言ったことがある。

彼女は基本的に他人に対する評点が辛く、愛想に乏しく、しかかも発言が容赦ない。

彼女が何と口にしようとは自分は好かれていると確信している七

夏からすれば、そういう態度も可愛いものだ。だが、一部の玄人さん衆などは彼女に本気で軽蔑される事さえ御褒美と認識している節もあり、そこまで来るとさすがに理解に苦しんでしまう。こういうのもカリスマ性の一種なのだろうか。銀髪に董色の虹彩といふ日本人離れした容姿が神秘的に見えるのは間違いないが、中身は結構俗っぽいのだが。

ともあれ、未来の斗流を背負って立つ二人の間には、わずかな禍根を残すことさえ望ましくない。これはさすがに少しぐらいは

「ううん、そんなことないよ」

僕たち共通の幼なじみにして篤史さんの彼女、結香さんが彼の弁護に入った。

彼女もそうとうな美人の類に属するが、詩紀ちゃんのような作り物じみた硬質の美貌とは方向性がだいぶ異なる。あとけないとさえ言える無邪気な表情に栗色のロングヘアの柔らかそうな印象が加わり、とつつきやすい雰囲気を醸し出している。

性格的にも、他人の悪意に鈍感で可愛らしい。いわゆる癒し系と言えば聞こえがいいが、実際の所はどうにも頼りないゆるボケキャラで、一人でちやんと買い物とかできるのか不安にさせられる。中学生としては幼い鉢巻と比べてさえ、精神年齢は大差ないようさえ感じられる事がある。

「トランプで負けが続くと、勝てるまでしつこく粘ってくるもの」

案の定、彼女のフォローはフォローになつていなかつた。

ネタとして狙つてやつているなら逆に大したものだが、これはツクリではない。大好きな篤史さんを本気で援護射撃しているつ

もりなのだ。見事な誤射だが。

幼なじみとして行く末が心配になつてくるが、本当に子供そのままに頼りないからこそ同性の保護欲もそそるわけで、意外と誰かに助けてもらいつつ何とかやっていけるのかもしれない。

知り合いの中にも何人かこういうタイプがいる。たとえば、浅葱谷高の佐倉明日香さん。固有能力の童殺しが発動していない時の彼女はとことんダメな人らしいが、大司さんや三条さんとその一派にがつちりサポートされている。発動中は発動中でこれまた色々と問題なのだが、それは今は関係ないので置いておくとして、紺咲ちゃんと親しまれ、男女問わざ人気の高い現国教師の野口紺咲先生も同タイプだ。あり得ないうつかりミスを生徒にフォローされることもたびたびで、とにかく頼りなくて手が掛かるらしい。なんでもA組有志が務める紺咲ちゃん係が彼女のスケジュールをプライベートまで管理して授業予定の確認どころかモニシングコールまで行つているそうだから、その抜けっぷりは推して知るべきだろう。それでも誰一人として彼女を悪く言う者はいないどころか、担任の彼女が不當な(?)非難を受けることがないようなど、クラス一丸となつたテスト前の特訓だの勉強会だのといった助け合いを欠かさない。結果、成績の平均はA組がトップと言うから面白いものだ。僕らC組から見ても、A組は不自然なほど自發的に一致団結しているように見える(ここらへん、現生徒会長にして模範的学生の体現者たる南山晴蘭嬢の手腕と言ふか豪腕が相当發揮されている模様)。

察しが悪がろうが要領が悪がろうが頼りながろうが、野口先生からは教え子の誰もを分け隔てなく大切に思う気持ちがあふれ出している。自覚的かどうかはともかくとして、皆それに惹かれ

野口先生を慕い、彼女を中心に団結できるのだろう。その様子をたとえて誰が呼んだか緋咲ちゃんファンクラブ。

ちなみに、豪快で理不尽な完璧超人さおり姉が担任を務めるB組はさおり一家呼ばわりされているが、由来については深く語るまい。

さらにどうでもいいが、生徒への介入を好まない陸奥十悟兄さんが担任の我がC組は、放任状態から自然発生した中央集権的カーストにより奇妙に統制されている。その様子を人呼んで詩紀様王朝だそうな。詩紀ちゃんが女王様はまさに適任だが、七夏が攝政か何かのよう扱われているのはどうにも面はゆいと言うか分不相応に感じられるが、どうだろうか。直接彼女と話すのは畏れ多いから七夏を介して、という感覚は分からぬもないのだが。話が逸れまくったが、結香さんがこのまま進学してよしんば教職についたりしたら、まさに野口先生みたいになるだろう。二人は身につけた雰囲気やしゃべり方だけでなく顔立ちを含めた容姿もかなり似ており、結香さんをして「ほら、あの、新川兄と一緒にいるチ緋咲ちゃん」なんて言わることもある。実は年の離れた姉妹だと言われても納得してしまいだが、別に親戚といふわけではない。珠坂は旧来人の出入りが少なかった土地なので、何百年単位での血の繋がりは否定できないが、それは誰と誰をつかまえても同じように言える話だ。

かくのごとく。遠野結香さんという人物は、これといった蹉跌もなく幸せに過ごし、常に誰かに保護されてきたゆえに警戒心を発達させてぬまま素直に育つた、という典型に思える。そんな天真爛漫な結香さんの対人スタイルは常に真っ向勝負のノーガード十全力タックルで、あさっての方向につっこむ事もたびたびだが、

そのときは誰かが下敷きになつてでも受け止めてくれるから良くなつたものだ。

一方の詩紀ちゃんの対人スタイルは、確実に急所を守るピーカーブー。ガードの隙間から相手を伺いつつ、相手の出方を伺うための挑発的な攻撃を繰り返し、反撃の有無を見極めようとする。彼女はいわば猜疑心の固まりだから、信頼した筈の相手に対してもたびたび忠誠心を試さずにはいられない。態度は自信満々で高圧的に見えるが、自分の感性に賭けることも他人をひとまず信頼することも怖がっているのだ。一応は彼氏という立場の七夏にしても彼女に心を開いてもらうには相当苦労したものだ。

もつとも七夏的にはツンデレ&クーデレウエルカムなわけで、信頼したいという思いの裏返しで攻撃を仕掛けてみるそのへんこそが詩紀ちゃん（&身体を共有する双子の姉妹の美紀ちゃん）の最も魅力的な部分なのだが。たびたび彼女に試されることを嬉しいと思えてしまうのは、もしかして特殊性癖の詩紀信者の精神機序に近いのかもしれない（彼らに対するつれない態度を愛ゆえと解釈するのはさすがに曲解がすぎる気がするが）。

幸いなことに、彼女のきつさや頑なな態度は現時点ではむしろカリスマの醸成に一役買っているし、皆楽しんで彼女をクラス団結の象徴として持ち上げている。しかし今後も他の人間が皆同じように受け取ってくれるなんて樂觀はできない。何の実權もない象徴的美少女であつてくれたならばどれだけ良かつたか。そうなれば七夏も一緒になつてふざけていたものを。彼女は取り扱いの難しい最終兵器だ。意識的・無意識的にかかわらず、ひとり落ち込んだ彼女達がどれだけ壊滅的なことをやらかすかについての前例は枚挙にいとまがない。

前置きが随分長くなつたが、結香さんと詩紀ちゃん、同年代の美少女としてジャンル分けされる二人のメンタリティーは、トイプードルと野良猫ぐらいに違う事をご理解いただけただろう。

しかし二人の間柄は至つて穏やかなもので、七夏やその他誰かの介入を必要とする事は多くない。

「たかがゲームの勝負でしょ？　ちっちゃ。人間性とか心根がミジンコなみにちっちゃいんじゃない？」

と、詩紀ちゃんは結香さんの自殺点に追い打ちするように篤史さんを貶めにかかったものだが、介入してきた結香さんに矛先を転じるつもりはないようだつた。

いかに詩紀ちゃんでも、徹底して無防備な結香さんに攻撃的な台詞をぶつけるには躊躇はあるようだ。なにしろ、結香さんへの攻撃は反撃に繋がらない。腰の人らないジャブを何発喰らわせようが痛いと感じさせる事も出来ず、抱きつかれて頬ずりされるのが毎の山だ。裏も表もなく、みんな大好きーを全力で表現して憚らない彼女に対して忠誠心を試そなどとしても、自己嫌悪を感じさせるだけの結果に終わるだろう。そういう自己防衛の手腕については、詩紀ちゃんは本当に敏感だから。

だが、それだけではないようでもある。あくまでも直感頼りのためうまく説明しがたいが、詩紀ちゃんの態度には、結香さんに対する何らかの苦手意識、と言うか遠慮のようなものも感じられる。

「その分大きいんだよ。その、物理的にな」

胸を張りにやりと笑みを浮かべた篤史さんの返答は、何と言うか、アレだつた。

「最低ね」

七夏が躊躇した言葉を、詩紀ちゃんははつきりと口にした。

「下品きわまりませんね」

「地上における最も愚劣な部類の冗談です」

続いて、宮藤の双子によるめつた打ち。

「なんだか知らんがとにかく篤史兄ちゃんはサイテー。リンリン

覚えた」

「篤史兄さんが最低なのはもはや宇宙的心理と言つていい」

さらに、七瀬の双子によつて人間的に完全否定。まさにフルボッコ。

さすがに少し気の毒になつてくるが、女の子率が高い場所で言つちやつた篤史さんが全面的に悪いので、下手をうつと藪蛇なりそうなフォローは行わないことにする。すでにピヨッているところへなおも続く連続口撃でノックアウト寸前の篤史さんに救いの手をさしのべたのは、やはり結香さんだった。

「でも篤史ちゃん、本当におつきいから」

「救いじやなかつた！」

しかもノーガード過ぎる！

「「おつきいのかつ！」」

「しつ、潮騒キボンヌ！」

「四百字詠め原稿用紙五枚、三日以内に詳しいレポートを。内容の機密レベルに応じ謝礼を検討。画像の添付があればなお高評価」

一齊に食いつく女性陣。品がなき過ぎるだろう。特にリンベン、目がやばい。

「おつきいよ。ナナちゃんは私よりちょっと大きいくらいだし、十悟さんはすらつとしてるけど、篤史ちゃんにはかなわないよ

ね？ 男の人としてはかなり大きい方だと思うけど……結香さんの、何が、何だって？

聞き捨てならない発言に、しばしの間、皆沈思黙考する。

「いやいやいや、身長の話じゃないから」

最初にたどり着いたのは詩紀ちゃんだった。いや、今のツッコ

ミは美紀ちゃんの方か。

「そう、もつともっと大切なこと」

「だから正確に答えて欲しい。ナナちゃんに入るかどうかの瀬戸際」

この暴走中学生どもを何とか黙らせねばならない。女の子が公衆の面前で言つてはならない単語を口にする前に。多少の実力行使も辞すまい、と拳を固めたところで、

「身長の話だよ。何言つてんだ」

深夜通販番組のガイジンさんよろしく大げさに肩をすくめ、篤史さんが飄々と言つた。

「それとも何か？ もつと別の、それこそ下品で愚劣で最低な何かの話と、下品で愚劣で最低なお前らが勘違いしたと、そういうことか？」

一人一人に向き直りつつ、人差し指を立てた拳を打ち振り、一言一言に力を込めて。

「馬場さんに謝れ！ お前らが一体何を想像したのか、じっくり聞かせてもらいたいもんだ」

呆れると同時に、さすがだと思つた。

自らミスリードしておいて糾弾の方向性をひっくり返す。冤罪と確定した者は単に当該容疑について無罪であるだけだが、あたかも正義の担い手であるかのように感じられるという感情的錯覚

を突いた見事な手腕だ。結香さんの発言はただの天然ボケだろうけど、篤史さんはそんなハプニングすらも戦術に取り込んで上手く利用している。

だが、そんな小手先の技術が通じるような相手でなかつたのは彼にとつては不運だった。いや、見誤った彼のミスというべきだろうか。

「いやだわ。日常会話にまで品性の下劣さがにじみ出でてしまうのかしら」と、詩紀ちゃんは指弾を真っ向から弾き返す。

「その积明は単なる言葉遊びに過ぎず、考慮に値しません」

「確かに発言を解釈するのは聞き手ですが、誤解の可能性を十分に配慮していない発言の責任は全面的に発言者にあります」

宮藤の初さん終さんは感情に影響されず理路整然と反撃。

「いいから脱げ。話はそれからだ」

「しばし待て、赤帯レンズのフルサイズ一眼持つてくる」

「そ・れ・だ！」

がしつ、と腕を組むリン・ベンはさらに目がイッちゃっていた。なにこれ怖い。

その後の彼女たちは、数を頼んで言いたい放題。滅多に隙を見せない篤史さんに対して、冷蔵庫に隠しておいたシュークリームを食べた数だの、寮の洗濯物の出し方だの、当初の話題とは大して関係のなきそな細々した恨み辛み苦情の数々が降り注ぐ。相手の理屈を無視して感情論を振りかざし、しかも感情を理屈で補強できるのだから、とかく頭のいい女子は恐ろしい。結香さんはと言えば、みんな何をそんなに興奮しているのかなど不思議そうに首をかしげるばかりで弁護人としては全く無力。

やはり触らぬ女子に祟りなし。篤史さんには申し訳ないが下手に動いて流れ弾を受けてもばかりないと、七夏は頭を引っ込めたくわばらくわばく雷雲の通過を待つたものだった。

浴びせかけられた悪態の詳細については彼があまりにも気の毒なので自分の心の内にとどめるだけにするが、いかに幼なじみの間柄であってもちょっとどうよ?とドン引きするぐらいだったとだけ表現しておく。むしろ、そこまで酷い扱いを受けても軽く笑い飛ばせてしまう篤史さんは、詩紀ちゃんの言には反するが、人間が相当に大きいのではないかと思えた。このエピソードを紹介したのはそういう意味だ。

だからこそ、現に目の前で起こっている事が信じられない。だがもう少し、時系列に沿った説明がいりそうだ。

珠坂に戻つてばかりの頃。大きな事件を通じて詩紀ちゃんへの気持ちを自覚した七夏が、彼女の重すぎる想いを受け止めることを決意した後。

篤史さんの部屋で、結香さんを交えて少しだけ話合つた事がある。詩紀ちゃんの隣を歩くというのがどういう事か。その覚悟を問われ百点ではないにせよ篤史さんが満足いく答えは返せたと思う。

逆に、篤史さんが詩紀ちゃんをどう思っているか。そう尋ね返してみた。物心ついた頃からの義理の兄妹という不思議な距離感はどうもののか。幼い子供の頃も、再会した今でも、彼らの関係をうまく捉えていたからだ。

明瞭な答えを期待した問い合わせではなかつたが、彼の答えは簡

潔かつ明瞭であった。

「命を賭けてでも守らねばならないもの、だな。斗流の一員としても、義理の兄としても」

彼の立場としては、百点満点の解答であつたろう。しかし感情面については注意深く排除されており、それ以上の問い合わせを封じる意志を感じられた。

「じゃあ、私は? と結香さんが問うと、

「命を賭けて守らねばならなかつたもの。一生背負うべき罪の証」分かつたような分からぬような抽象的な答えに、結香さんは、ふーん、と気の入らない返事に続き、

「よく分からぬけど、それって大切なの?」

と、さらに問うた。

「大切だ」

「えへへー」

結香さんは満足げだが、たつた一言によつてお手軽に喚起された童女のような屈託のない笑顔に、なぜか七夏は薄ら寒さを感じたものだ。理由はわからないが、これ以上深入りすべきではないと感じた。忙しさ以外に、篤史さん達の事情の把握を先送りにした理由があつたとすれば、きっとこれだろう。事情を知るであろうさおりさんや十悟兄さん達が何も語ろうとしないこともまた、七夏が知るべきではない事を意味していると考へていた。

だが、この時の七夏の選択はきっと間違いだつたのだろう。斗流宗家の隣を歩くものには、感情を廃して行動せねばならないところがある。篤史さんは短いやりとりの中で七夏にそれを教えたかったのではないか。知つても解決できないことを知る責任から逃げるな、と。斗流宗家の許婚の名をもつて問えば、彼はすべてを

語ってくれたのではない。か。

あの日の詩紀ちゃんは確かに歩み寄ってくれた。知つてもただ受け入れるしかない事実をこれ以上はない形ではっきりと七夏の目の前に叩き付け、選択を迫った。この原罪を背負つて共に歩けるか、と。まったく、無茶ばかり要求する似たもの義兄妹だ。ならば、この時七夏がもう一つの問い合わせを発することが出来たなら、現状は変わつたのだろうか。

歴史の変動を見通す尚書の星鬼の祝福あるいは呪いを受けた竜胆大輔なら、何かのヒントをくれるだろうか。彼の相棒の睡蓮さんや玲韻さんに頼んだならば、あるいは詩紀ちゃんに頼めば、やり直しは可能だろうか。いや、協力はしてくれるだろうが、あれはそこまで使い勝手のいい力ではないだろうし、個人的後悔の精算などに巻き込んで氣を使わせるのも悪い。いや、人を使う立場にある者は冷徹であるべきだ。単純に割に合わない取り引きだ。彼らに負担をかけるべき時は今ではない。

所詮は人の心の問題でしかない。何も致命的なことは起こっていない。過去をやり直さずとも、今ここで決着をつけられる問題だ。我々は言葉を持った人間なのだから。反則技での解決の可能性を無視し、七夏は心を前に向けなおした。しかし、これもまた間違いであることに後に気づく事になるのだが。

儀式まで約一週間という限られた時間を使い、七夏は調べられるだけのことを調べることにした。
さおりさんや十悟さんから事情を聞き出すことも考えたが、彼らの口から語られる言葉は彼らの言葉でしかないし、核心をそ

まま伝えてくれるほど甘い人たちではない。現状では権威をもつて迫ることも困難だ。客観的事実と推理をもつて仮説を武器としておいて逃げ道を確実に塞がねば、間違なくかわされる。何をやるにしても、まずは事実の調査だ。

一つだけ明らかなることがある。篤史さんを知るなら、詩紀ちゃんを、そして結香さんを知ることだ。

今更と言えば今更だが、まずは公式記録。役所をあたる事にした。

「突然ですが、ちょっとした過去の悪事を告白します」
本当に突然だった。

堂々と二人で学校を公欠して市役所に向かうバスの中、詩紀ちゃん（美紀ちゃんの方）がそんな事を宣わった。

「いえ、こういう場合は激白とか言うのかしら」「は？」

大抵は全然激っぽくない時に限って使われる言葉なので、かえつて強調の意味が乏しく軽薄にも感じられるのだが。

「ナナが本気になつて調査を始めたら、知られてしまふのも時間の問題だし。思い切つてぶつちやける事にしたわ」

自分を納得させようとするかのように何度も頷きつつ、詩紀と美紀を行き来しながら、らしからぬ言葉を紡ぎ出す。
「話しそうな人の口を片っ端から封じて回るのも面倒だし。言つてしまつた方が手つ取り早いのよ。王様の耳はロバの耳。言うは一生の罪、言わざるは一生の面倒と言うでしきう」

あんまり言わないと思う。

「僕は神父さんでも牧師さんでもないんだけどね」

「懺悔でも告解でもないわ。どこの神様に許してもらおうとも想わないし、ナナ以外の誰がどう思おうと知った事じやない。ナナ以外の誰も罪に問えないのだから、ナナ以外の誰が許せるわけでもないのよ」

そこまで言つてもらえるのは光榮の至りだが、いくらなんでも責任重大すぎる。

「それ、僕が詩紀ちゃんを許せなかつたらどうするの」「絶対に許さない。絶対にだ」

尋ねた自分が馬鹿でした。

「それにナナを見誤つてた自分も許せないわね」

それは怖い。

彼女を落ち込ませるのはこの町、いや国にとつても危険すぎるし、七夏個人としても本意ではない。でも、こと七夏の精神状態の把握に関しては嘘など通用する相手ではないのだ。

「笑つて許せるぐらいの内容であることを心底願うよ」

なにしろ、感情なんてなるようにならぬ。表面的な発露を抑えることは出来ても、感情そのものを偽ることは困難だ。ならば七夏に出来ることは、願つたり祈つたりぐらいしかない。

「私も……産みの両親を、殺したの」

いきなりだった。前振りも、心の準備をする間もなければ、言い訳の要素もなかった。

「でも良かった。これなら大丈夫。

「許す」

七夏を不安げに見つめていた董色の目が、次第に据わつてくるのが分かった。美人だけに大迫力。

「……どうして、なんでそんな簡単に許しちゃつてるの？」

「なんで怒られるのだろうか？」

「許してもらえると思ってたんじやなかつたの？」

「許してもらえなきや困ると思つてたのよ」「なるほど」

「なるほどじやないっ！」

当然のように説明を要求された。

感情に理由の説明が必要なのかなあと思うが、無理を承知であえて言葉への翻訳を試みる。

「好んでそんなことをできるような人間を、こんなに好きになれるはずがない、ってところかな」

「卑怯者！ 女たらし！」

一瞬で沸騰した詩紀ちゃんに、真っ赤な顔で怒鳴られた。

いや、今の台詞は二人分だつた気がする。

「……そういう事真顔で言う男だった。緊張のあまり油断していたわ」

語義的には緊張のために油断つて自己矛盾してる気がするけど、言わんとすることはなんとなく分かる。

「僕やリンペんのご両親の事故と同じでしょ？ 不可抗力なら詩紀ちゃんの責任じゃない」

七夏が物心ついた頃には、新川兄妹はすでに一緒にだった。 彼女（達）がいつ樞に憑かれたのかは分からぬが、二歳や三歳の少女が正攻法で大人をどうこうできるはずがない。ならば、超自然的な力が介在している事は間違いないだろう。

北斗七鬼の頭である樞の魂は彼女の身体に憑いてはいるが、詩紀・美紀の双子の魂の意志によつて抑えられ、辛うじて休眠状態を保つてゐるというのは以前にさおりさんから聞かされているし、

七夏自身も確認している。宮藤の双子がそれぞれの片腕に振り分ける形で強大な北落師門の星鬼を宿しているのも、おそらくは同様の理屈なのだろう。彼女たちが長手袋と双子の独立性をもつて北落師門の暴走を封じているのと同様、樞の猛威が抑えられるのも危ういバランスの上でしかないのだ。

詩紀ちゃんの精神が樞の巫女としての役割を果たせるレベルま

で成長したこと、十年前の事件は起こった。成長とは変化であり、既存のバランスを崩すことでもあるからだ。ならば、人生において最大の成長にして変動とは、誕生のその時ではないか。

という推理を語ると、

「ご明察。さすがね。ナナに隠し事なんて出来る気がしないわ」

淡淡と褒められてしまった。だが、詩紀ちゃんの表情はとても褒めているようなそれではない。

「あの時、私の中の樞は目覚めていたの。いえ、私達が樞の一部

だったとしても言うべきかしら」

母体より生命体としての独立を果たしたその瞬間、身体の本来の主である双子の未熟すぎる精神が無防備に暴露されるようになつた。その事により、樞の精魂が双子の精魂を上書きするように精神・身体を支配する事が出来たのだろう。十分あり得る話だ。

新生児の肉体を操ったところでそれだけで物理的に何が出来るわけでもないが、不十分とはいえる身体を得ているということは現人

神としての干渉能力を備えていることをも意味する。

「さすがに記憶は不鮮明だけれど、感情だけはね、はつきりと残っているのよ。父親が私の首に手をかけた時の。こんなところで死んでたまるか、殺されてなるものかって」

詩紀ちゃんは両拳を握りしめ、血がにじむほどにぎりぎりと歯

を鳴らす。あたかも感情を反芻するかのように。

防衛本能から怒り・攻撃衝動への転化。遠い過去の出来事であつても、純粹な負の感情を冷静なままに思い返すことは困難なのだろう。

「だから、私が、私の意志で、やったの」

直接の原因は、酸素ボンベの破裂だと言う。

偶然を制御するのは鬼神の得意技だ。巫女として未成熟であつても、信仰を束ねる陣のサポートがなくとも、病院という場所には怨嗟と呪いが渦巻いている。それを用いれば人間の一人や二人消し去る程度のことは可能だろう。

斗流の末席に籍を置いていた彼女の両親は、賢明にも彼女に宿るもの正体とその危険性を正しく察知し、自分たちの娘ごと抹殺しようとした。人間としてはともかく、斗流の一員の行動としては理解できるものだ。

鬼憑きの兆候は胎児の頃からあつたに違いない。その時点でしかるべき筋の指示を仰いで対処にあたつていれば、きっと話は違つていたのだろう。できれば間違いであって欲しい、きっと何かの間違いだ、という希望的観測。受け入れがたい事実を受け入れるにあたつて葛藤があつたのは人の親として当然だ。しかし、結果としてその躊躇が命取りになつた。

実際、事件は発生直後に收拾された。先代の宗家の新川喜一老（篤史さんのお爺さんだ）や、新川に第一位を譲つたとはいえたが実力に衰えの無かつた壱川翁、それに芳村のお志摩さんらが現場に乗り込み、彼らの命脈をもつて樞にさらなる封印を重ねたのだと言う。であったからこそ、壱川翁が亡くなり封印が弱まつた事が十年前の事件の一つの原因となりえたのだが。

以上は詩紀ちゃんの記憶と知識、七夏の限られた知識、そして

公開された情報からの推定だが、おそらくは真実から大きく外れとはいえないだろうと確信している。

「それでも不可抗力は不可抗力だよ。たとえ不可抗力でなくとも、

詩紀ちゃんを責める気にはなれないけどね」

生物が本能に従って身を守るのは当然だ。例え相手が自分の親

でも、その目的が世界全体のためであつても。自分の命を脅かす

ものがあるなら、排除しようとするのは正当防衛だろう。それを

非難する資格など誰にもない。

七夏の発言が本気かどうか、見極めんとするかのように詩紀ちゃんが視線をぶつけてくる。ぶしつけに、遠慮無く。そして真摯に容赦なく。

「よろしい。合格よ。許してあげる」

そして見事なまでの上から目線で。

まあ、それでこそ詩紀ちゃんなのだが。

精神によつて補強されていないむき出しの魂が、強大な樞の魂

と同居しているわけであるから、その影響は不可避だ。詩紀ちゃんは魔王の名代としての個性を率先して身につける手段を選択す

ることで、逆説的に致命的な汚染を回避する術とした。彼女が期

せずして人間性の防波堤として働いたことで、双子の片割れである美紀ちゃんは人間としての自覚を保つことが出来たのだとも言える。

確かに上手い適応手段だが、それなりの副作用もある。偽悪的な詩紀ちゃんは、ちょくちょくこうして七夏の反応を試してくる。

無理にでも現状の肯定を得ることで、魔王の影響を受けた自分の居場所を人の住む世界の内に確保し続けたいという渴望の為せる

業なのだろうだ。すなわち、彼女が心の平穏を保つためにはどうしても必要な儀式なのだ。

いちいち相手にするのが面倒ではないとは言わないが、自分にだけは甘えを見せてくれてる証左と思えば、その面倒さもまた嬉しくも誇らしくも感じられる。

「そりゃ光榮」

駅前でバスを降り、すぐ向かいの市役所にお邪魔する。

ほんの三年ほど前に立て替えられたばかりのピカピカの建物で、いかにもハイカラ（超死語）な外観。バリアフリーを考慮してだろ、正面玄関の階段脇にはスロープも造りつけられている。ただ、そこまで配慮している割には、見栄え優先のつやかなタイルを使つているのに感心しない。幸い今日は雪はないし地面は乾燥しているが、天候によってはじいちやんばあちゃんには危険かも、と思ったが口にはしないでおく。

「滑りそうね」

言つちやうし。

「篤史さんたち、受験生なんだけど」

「どうせみんな珠大の推薦枠じゃない」

詩紀ちゃんの言もいちいちごもとのものではあるが、言霊使いの端くれとしては不用意に迂闊なことを口にするのには抵抗があるのだ。

役所の中に入つてみれば、最近の建築の例に漏れずガラス張りと吹き抜けを多用しているため外光が多く取り込まれるようになつておりて、こういう施設につきものの堅苦しさの少ない明るい印象を醸し出している。だが、とにかく人が少ないためどうにも

氣怠げな印象だ。

「もしもし」

入り口の右手側、人形のように不動を保っている案内係のお姉さんに声をかける。

「！」

頭上の案内板には今風にコンシェルジュとか書いてあるが、これもお年寄りには絶対分からぬ、なんて余計なことを考へられるほどの間があつて、

「はい。本日はどのような目的でご来店でしょうか？」

型のごとき台詞。声色は落ち着き払っている。役所の最前線だけにおかしな客も多いだろうし、いちいち動搖はしていられないのだろう。

「あの、戸籍係ってどちらですか？」

「戸籍係でしたら、そちらの階段を上つて二階正面、市民課の三番窓口です」

「二階ですね。ありがとうございました」

「どういたしまして」

その後のやり取りは至つてスムーズだった。

確かに反応の遅れはあつたが、ド派手な詩紀ちゃん連れだといふ事を考えれば驚くには値しない。むしろ我に返るのは早かつた方ではなかろうか。さすがにプロといったところだ。

当の戸籍係で書類閲覧の申請を行うと、

「そちらの椅子にお掛けになつて、しばらくお待ちください」

担当職員（まじめが取り得、って感じの気の弱そうなお兄さんだった）は窓口の端末をかちやかちややっていたが、やがて申請

書を持って奥のコンパートメントへと姿を消してしまった。

まあ、これは完全に横車の部類なので、素直に教えてもらえるとは思っていない。

呪歌でもつて一時的に聴力をブーストしてみる。まもなく、先ほどの職員の声を探し当てることに成功した。

「これつていつぞや教わった特例甲ですよね？ 気づかなかつたフリして出しちゃえればいいんですよね？」

「特例甲？ んなものそうそうあるかつての……」

もう一人、上司か先輩らしい別の声が質問に答える。

「つてマジかよ……しかも特例乙じゃねえか！」

「え？ 遠野って家も、そうなんですか？」

「お前はまだ短いからな。とにかく、これM裁量な。そっちの方は俺が話つけとくから、お客様を応接室までご案内して差し上げる。あと、もう一人の名前もちゃんと伺つとけよ。とにかく、くれぐれも失礼の無いよう。機嫌を損ねたら例えじやなしに首が飛ぶぞ」

「つてまたまたあ。綺麗な女の子二人組なんですけど」「覚えとけ。綺麗な薔薇には猛毒があるもんだ」

「トゲでしょトゲ」

聞こえていないことを承知でツッコミを入れてしまつた。詩紀ちゃんのことを言つてゐるのだとすれば、間違つてゐるのに的確すぎる形容だ。

男なんだけど、つてツッコミの方が優先順位が低いのが我ながら悲しい。

「上手いこと言うわ。ナナつてまさにそんな感じだし」

しかもブーストなしで聞こえるとか。しのりんイヤーは地獄耳。

その後速やかに応接室って書いてある部屋へと通された。盗み聞きした情報の通りだ。

担当の職員さん（名札によれば木内さん）は恐縮しきりで、高校生相手に下にも置かないもてなしっぷり。

おされたお菓子って知る人ぞ知る松実堂のきんつばだし、お茶の方も秘蔵のお茶つ葉に違いなかつた。

「この銘柄ってもう少しまろやかさがあつた気がするのだけれど、どうしてかしら。ねえナナ、給湯室を借りて煎れなおしてみてもうえないかしら？」

これだ。

先輩に言われたとおり精一杯配慮しているのが分かるだけに、大変申し訳なく感じる。

真っ青になる木内さんを片手で押んで起き、

「十分おいしいけど。もしかしてストレスの影響じゃない？ 自分じゃ気ついていないようでも、体調は正直だつたり」

「そう？ ナナが言うのならそなのかもね」

露骨にはつとした表情を見せる木内さんが、今度は点数稼ぎに出てきた。

「え、五ヶ瀬さんも新川さんもともお綺麗んですけど、お二人とも学校ではさぞやおもてになるんでしょうね」

なんでのこの組み合わせて僕が先なのだろうか、そこが解せない。

万年制服の生徒会長じゃあるまいし、との一言で押し切られてしまつたが、やっぱり制服にしておくべきだった。

初対面の人に女子と間違われるのは仕方ないとしても、痛くも痒くもない腹を邪推されても危険なだけなので、言うべきことは

言つておくことにする。

「そのような事実はありません。断じて。誰かさんにだけもってればそれで十分なので」

「そんな謙遜は必要ないわ。どうせ連れ歩いて見せびらかすのなら、モテモテの人気者の方が気持ちいいし」

「はあ、左様ですか」

彼氏つてファンションじゃないんだけどなー。

この二人つてやっぱりそういう系の関係なのか。やっぱり旧家の人们は何か違うな、とでも言いたげな目で見られてるんですね。やっぱり誤解してる、木下さん。

一応誤解を解いておきたいと口を開きかけたところで、応接室の扉を乱暴に開け、壮年の紳士が飛び込んできた。

「お待たせしました！ 市長の九條勇武でございます！」

紳士は肩で息をつきながらそな名乗ると、冬だというのに額からだらだらと汗を流しながら、深々と腰を折つてみせた。

「ん、手間をかけるわ」

こういう扱いに慣れているのだろうか、詩紀ちゃんはソファーにかけたままで傲然と言つてのける。

「新川・五ヶ瀬のお世継ぎ御自らお運びあそばされるとは恐縮の至り。遠慮無くお呼び付けいただければ、何をおいてもこちらから参上させていただいたものを」

うわ。

いくら何でも大仰すぎる。水戸黄門やら暴れん坊将軍じゃああるまいし。

へりくだつた態度もここまで極端だと暴力と大差ない。正直、いたたまれない。

こちらも慌てて起立して頭を下げる返し、着席を促した。

「頭を上げてください。わざわざ市長さんのお手を煩わせるほど話じゃないので、かえって恐縮です」

「いえ、十家の方々のお力添えあってのわたくしでございます。選挙へのご協力はもちろん、市政の運営においても議会対策においても、多大なご支援をいただかなければ一日としてやつてはいけません」

それが全部本当ならさすがに頗りなさ過ぎる気がするが、いくらなんでもただの操り人形で務まるような立場とは思えないから、かなりの謙遜が入っているだろう。だがそれはそうとして、ひとかど以上の社会的立場のある人間が学生相手にここまでするのだから、十家を相當に重視していることは間違いない。

「一体どんな便宜を計らっているのか、具体的に尋ねてみたいようだ、聞かないでおいた方がいいような。法律に触れることをやつていなければ良いのだが、おそらく、きっと、間違いなく、やつてるだろうな。

「で、情報の方は教えてもらえるのでしょうか？」

挨拶もそこそこの詩紀ちゃんの單刀直入な質問に、市長さんはらしからぬ花柄のハンカチ（奥さんの趣味かな？）で汗を拭き拭き、口を潤す。

「それが……なんと言うか、大変申し訳ないのですが」と、先ほどまでの滑舌が嘘のように、要領を得ない。

「御宗家の御命令というのならばともかく、たとえ十家の方のお申し入れでも、他の十家の情報をこちらの一存では開示いたしかねまして」

一般人の情報なら教えてくれるんだ、と突っ込むのも気の毒か。

彼にしてみれば、対立している複数の上役のどちらにつくかを迫られているようなものだ。誰かの意向に従った結果として誰かににらまれるような事態に陥ることは避けたいのだろう。絵に描いたような二律背反状態だ。これを言つて機嫌を損ねたくない、極端な機嫌取りしてたのかもしれない。

「いかがでしょうか。形式的にでも遠野様の委任か、宗家代行からの命令という体裁をとっていただければ、こちらとしても喜んでご協力させていただけます」

それが出来れば直にさおりさんに聞き出す方が早いんだけどね。「ナナ」詩紀ちゃんが細いおとがいをしゃくつてみせる。結局、こうなるのか。

五・七・五、七・七で、さしもの市長の意志も折れた。

「一般人で下の句まで保つたのは初めてじゃない？」

「珠坂の市長が務まるぐらいだから、この人もただ者じゃないんだよ。もともと宮藤の傍流らしいし」

勅の術歌をもつて命じられれば、それは神の御言葉か皇帝の勅命も同じだ。大抵は五・七ぐらいで余計な個人的情報までぶちまけてしまうようになる。事実、担当の木内さんは学生時代の一回だけの浮氣を告白はじめた。それを聞かされてどうしろと。「任せた。ナナの好きにして」

詩紀ちゃんの許可があつたので、彼女さんだか奥さんだかの代理で許してあげた。

「あなたの罪を許しましょう。過去のあやまちは忘れ、今後は前向きに、大切な人のために生きなさい」

今更その人にぶつちやけても、揉めるだけだろうし。

「ありがとうございます！ ありがとうございます！ 金輪際他の女に見向きもしないと誓います！ 五ヶ瀬さんにはどきつと来ましたけど、忘れます！」

これでいいのだろう。良いことにしておく。七夏自身も前向きに生きることにする。

ともあれ、市長さんはその権限をもって記録の閲覧を特別に許可してくれた。無理矢理操るのは気が進まないが、状況が状況だから頼らせてもらおう。

詩紀ちゃんが樞の名をもって命じればより確実に同様の効果が期待できるのは確かなのだが、あれには正気度低下の副作用があるので使用が憚られる。街のために頑張ってくれる優秀な政治家を一時の都合で廃人にしてしまうようでは、さすがにやりすぎだろう。

ようやく目にすることが出来た記録は、困惑させられるものだった。

遠野結香さんは書面上は一度死んでいる。正確にはご両親とともに十一年前の夏に失踪し、四年前の段階で死亡認定されていた。しかし、二年前になつて結香さんだけが生存を確認され、死亡扱いは取り消されている。

これを一体どう解釈すればよいものか。

「神隠し？」 竜宮？ 妖精郷？ それとも北朝鮮にでも拉致られてた？」

詩紀ちゃん、いや美紀ちゃんが茶化すように言う。

事務的なミスが見つかつたので修正しました、って解釈する方

が普通なのだろう。ただふと行方しれずになつて、九年も後に何事もなかつたかのように見つかった、なんて据わりの悪い解釈よりもはよほど説得力がある。

大人が何らかの目的で蒸発したのならともかく、当時の彼女は小学校低学年だ。もし失踪が眞実であつたなら、そこには何らかの事件性を考えざるを得ない。何らかのドラマの存在を期待してしまえば、気持ちの良い想像にはならない。

しかし、そこに何らかの壮絶な出来事を挿入するには、彼女の性格は脳天気に過ぎる。

心の傷を隠して陽気に振る舞つてゐる、という感じではまるでない。人の発言は字義通りに受け止めるし、彼女自身の発言には言外の意味などない。たとえて言うなら、古典的な漫画に出てくる良くできた幼なじみのようだ。理想的なよい子であると同時に、薄っぺらで個性に乏しい。

詩紀ちゃん達のようなのはさすがに極端としても、思春期の少年少女は大抵もとと面倒くさいものだ。言つては何だが、典型的アホキヤラの鈴菜でも、あれで年齢相応にものを考えている（はず）。一方、裏も表も感じさせない結香さんへの対応は実にお手軽ですむ。

それだけではない。彼女には独特のバランスの悪さがある。

見た目の緩い雰囲気からはなかなか想像がつかないが、結香さんの身体能力はあれで相当に高い（ここは、鬼憑きの例に漏れず、と言うべきか）。人数の足りない運動部の助つ人として頻繁にかり出されている人気者なのだ。バスケットボールをやらせれば百六十センチ台でダンクショートとかこなすし、ソフトボールをやれば崩れた体勢からでも腕力でホームランにしてしまう。

それなのに駆け引きとか全然出来ないのが、いかにも彼女らしい。

相手の意表をつこうなんて思いもよらず、フェイク動作には

反射神経だけで対処してしまう。外野から一直線にキャッチャー

に送球できるのに、上手くボールを回せばダブルプレイにできる

とかまで気が回らない。勢いで味方を引っ張ることは出来ても、

何らかの作戦でもってチームを率いて戦うとかはからつきしだ。

目立ちたがってスタンドプレイを好むとかいうわけではない。

ただ臨機応変が苦手なだけで、指示をもらさえすれば素直にチ

ームメイトに合わせられる。複雑な判断を含めた指示には対応し

きれないところが、いかにも、らしい。天真爛漫で抜けたところ

も多く、鼻につくところがない。いろんな部で重宝され、愛され

ている所以だ。ピーカン結香ちゃんとはよく言つたものだと思う。

面白いのは、篤史さんが見ているときは動きが一変すること

だ。彼がごく簡単な指示をとばすだけで、結香さんのプレイが玄

人のそれになる。観覧席からの声かけだけで巧みにチームの力を

引き出せる篤史さんが、弱小部の助っ人監督として頼られている

のは確かだ。だが、結香さんの変貌っぷりはほとんど別人。身の

こなしも試合運びも、まるで篤史さんそのものに見える。

それでいてなお、自分がどういう目的で動いているのかを全然

理解できておらず、結果として個人でのプレイスタイルは全然変

化しない。結香さんが結香さんたるゆえんだろう。意味が分から

ないままにああも迷いなく適切に動けるものかと、感心を通り越

して不思議に思える。背景に全幅の信頼があるのは間違いないの

だろうが、強い絆で結ばれたペットと主人というより（この例え

で彼女が機嫌を損ねることはないと断言できる）、^{オバコロード}上書きでの遠

それにしても、
「ゆつか、上上下下左右左右BダッシュA！」

「はいっ！」

なんてのはいくら何でも酷すぎだろうと、篤史さんにそれとな

く苦言を呈してみた事がある。さすがにリモコンとか言うのは憚

られたので、

「一心同体・以心伝心って感じですよね」

とオブラーートに包んでいたところ、

「ゆつかは俺の幽波紋スカンドだからな」

と笑って断定されてしまった。

「俺がゆつかを一番上手に使えるんだ！ 敵に渡す大事なりモ

コン！ シンクログラフ安定しています！」

続いてロボ扱い。デリカシーゼロ。

「篤史ちゃんって女の子の扱いが上手いんだよ。私だけじゃなく

て、みんなそう言つてるもんね」

発言にはだいぶ語弊があるが、結香さんは気にしている節がないばかりか喜んでさえいたわけで。

本人が幸せなら良いか、と当時は思つていたが……：

彼女の自意識の薄さはやっぱり不自然すぎる。人形っぽい容姿

の詩紀ちゃんや、人形っぽい態度の撫菜よりも、表情豊かで活動

的な結香さんの方がよっぽど人形っぽく感じられるのはどうした

ことか。

「もともとそういう役割を期待されているキャラクターなのかも

しないわね」

考えを巡らせていると、詩紀ちゃんがそんなことを言い出した。

「綺麗で素直でしかも理由もなく兄さんが大好き、兄さんがいるくては生きていけない、でも兄さんを束縛しようとはしないなんて、兄さんにとつて都合が良すぎるもの」

じつに身も蓋もない事をおっしゃる。

「ナナが今のナナなのは私がそう望んだから。私が今の私なのはナナがそう望んだから。自分が自分であるためどうしても曲げられないところ以外は、お互いの好みを反映しているでしょう。卵が先か鶏が先かはわからないけど。私のいる珠坂ってのはそういう場所なのだから」

「……僕が女顔なのも筋肉つかないのも詩紀ちゃん達のせい、と『悪目立ちする髪の色も、年齢相応にカッブが大きくならないのも、ナナのせい、と』

む、藪蛇だつたか。

でも詩紀ちゃんに隠し事しても無駄。

「うん、そこは否定しない」

「開き直った!？」

詩紀ちゃんの容姿が七夏的には確かに確かなので、こんなところで自分に嘘はつけない。無意識ではあっても、自分の

生きやすさやプライドよりも七夏の好みを優先してくれたのなら、多少の嫌味ぐらいは我慢しないといけないだろう。

「非難は甘んじて受けけるから、ぜひともそのままでお願ひします」

感謝の気持ちを込め、精一杯真摯な態度で頭を下げておく。

「つて、そこまで!？」

「ぜひともそのままでお願ひします」

「二回言った!? そんなに大事なの?」

まだ頭上げない方がよさそう。

「……はあ、分かったわ。他の誰かならともかく、ナナがそこまで言うのなら諦めるしかないか」

こんなに大きなため息は初めてかもしれない。でも快諾でなくとも承認は承認。

彼女の両手を握りしめて何度も何度も振り、だめ押し的に感謝の気持ちを表現。

「ありがとう！ 本当にありがとう！」

「選挙直後の候補者ですか。そこまで喜ばれても複雑なのだけれど」

呆れ顔で言うが、頬が赤らんでいる。明らかに美紀ちゃんが出てるし。満更ではないのだろう。

「もう、話を戻しましょう」

「いつでもどうぞ！」

「つやつやしちゃってまあ……」

なんとか諦めてくれたと見える。ここまで念を押しておけば、

後ろ向きドリフトで書き換えされちゃう心配はいらないだろう。

かくしてこの世で何番目かに大切なものは守られた。黒髪巨乳の詩紀ちゃんなんて詩紀ちゃんじやないし。

「少なくとも今現在の結香さんは、徹底的に兄さんに従属した存在のよう見えるわ。誰かの意志・願いが介在して、本来とは別のモノになってしまっているのかもしれない。自分がそれを叶えたのかもしれないのに、仮説ぐらいしか出せないなんて無責任だけど」

「きっとそれで良いんだよ。自分で歴史を変動させつつ、大輔君みたいに変動を認識までできたら、詩紀ちゃんはきっとその重さに耐えられないからね」

「……そうかも」

七夏が引つかかったのはそこではない。

「別のモノになる、か」

その言葉は、既に確定した歴史を書き換える、以外の意味も有するのかかもしれない。

かつての事件の時。押し寄せる深みの者どもを押し返すために、結香さんは髪を変形させて鞭や刃として用いていた。詩紀ちゃんは変幻の星鬼の術だと言っていたが、あれは何だったのか。改めて尋ねてみる。

「あれはさおりさんの受け売り。権^{かり}あるいは^{はがき}の憑いた身体は仮想物質とでも言うしかないものに置き換わり、通常の物理法則には従わないのだそよう。姿を保つために外部からの認識を必要とする一方で、不確定状態を介することで必要に応じて瞬時に最適な姿をとれるって」

そういう理屈だとすると、鬼を呼んでその力を引き出して利用する術式と言うには無理がある。彼女自身の体を変貌させているのだから、鬼憑きなのだろう。

と、仮説を披露してみると、

「同感。さつきの話のように誰かの願いが絡んでいるのか、それともただの偶然かは分からぬけど。何らかの事故で身体の一部を損なって、そこに鬼が憑いたのでしきうね。初・終の腕と同じようなものなのでしょうけど、高度な擬態能力のおかげでどこがどうなか分からぬってだけで……ん、知っていたつもりでも、こうやって口に出てみると情報が整理されるものね」

「髪だけではないかもしない、と」

十年以上前の結香さんの、少年じみた姿を覚えている。確かに

愛らしい子供ではあったが、顔のパーツの作りも全体としての方向性もだいぶ異なる。かつての彼女を今の容姿と結びつけて同一人物と同定することは難しいだろう。

大輔ではなく、七夏の記憶上に不自然な不連続性がある。少なくともその部分に関しては、ドリフトによる変革ではない。

「そうそう。昔、寄○獸って漫画があつてね」

「すっごく嫌な例えをありがとう」

結香さんの綺麗な顔がぱかっと開くようなのは勘弁して欲しい。「じやあ物○X」ということで

「もつと嫌だから」

この話題はすっぱり忘れよう。

ともかく、彼女に鬼が憑く原因となつた出来事にこそ、ここ最近の篤史さんの態度の鍵がありそうだ。二人が僕らの前から姿を消したのは、七夏が巻き込まれた例の事故の一年ほど前だったはず。

「うちの両親からは転校したって聞かされてたけど、詩紀ちゃんは何か知らない？」

「結香さんが珠坂に戻ったのは私の少し前だそうよ。そのさらに少し後に兄さんが戻ってきて、色々あって結香さんとくつついた」色々あって、って……まあ重要ではないと判断されたんだろうけど。

「十家の師弟が集団生活を送るのと一時珠坂を離れるのは、昔からの習わしだって聞いたことはあるけど」

詩紀ちゃんは一度言葉を切った。

「でも、私もナナもワケありだつた」

「そのときに何かあつたと考えるのが自然だね」

そして七夏達のよう、珠坂から隔離されていたと。

「ちなみに、リンペーンはずつとここにいたんだよね？」

「初一人での二人の面倒は見切れないでしょ」

「それは至極もつともではあるが。」

「つまりは、必ず離れなければならないって訳ではないんだね」

さらに疑惑が深まつた。

結香さんがどういう状態になつてゐるのか。そして彼女に何が起こつたのか。

「もう直接会つて調べてみるしかないか」

彼女自身に自覚が無くても、今の七夏であれば魂の状態を調べる術はいくつか使える。

「兄さんに宣戰布告と判断されるわよ」

「そつか、本末転倒か」

篤史さんの気が変わるので期待するなら、ダイレクトに結香さんには踏み込むような真似は逆効果だらう。正攻法で集められるだけの情報を集める。そのあとは想像の翼を広げ、推理するしかない。

「ともかく、核心に迫る何かはつかめたわ。あとはこのカードをいつ切るか。最大限の効果が得られるタイミングを見計らわない」と

そんな悪辣な真似をやるつもりなんか無いくせに。相変わらず偽善的な詩紀ちやんだった。

「なに？ 言いたいことがあるのなら、言つたらどう？」

「いやあ、そういうところが可愛いなど」

「（つ！）

聞くに堪えない悪口雑言はカットさせていただきます。

そして七夏達はそれなりの仮説を携えて今に至るわけであるが。

「……なんぞこれ」

七夏は詩紀ちゃんと並んで座らされている。背後の席には^{バンバン}鈴菜と^{ソソソソ}初さん。

「なんぞこれ」

大事じやないけど二人で一回ずつ言つてしまつた。

神職の衣装を身にまとつた芳村黒男さんが莊厳な雅楽の演奏とともに中央に進み出て、既に斗流宗家位の返還を受けている旨を宣言した。

どの候補者にも肩入れせず中立を保ち審判を下せる立場の代表者として、形式的には宗家直轄で実質には独立組織である肅清部隊の頭が出張ってきたという事らしい。

そこまではいい。優勝旗とかチャンピオンベルトの返還みたいなのだろう。歴史のある神社の境内あたりなら、そういうのも相応しい気がする。

しかし、珠坂大学のドーム野球場を借り切つて設営されているのは、一言で説明するならバラエティーショーのセットに近い。いかにもチーム制でのクイズ番組の形式だ。

アリーナ席にもスタンドにもギャラリー、ギャラリー、ギャラリー、そしてギャラリー。大して大きな市でもない珠坂の一体どこにこれだけの人間が居たのか、という疑問は一瞬で氷解した。

見る者が見れば、明らかに人でないモノが相当数紛れ込んでいるのがわかる。思想的な同調や恐怖による支配により斗流に従う妖怪が存在するであろう事には薄々は気づいていたが、よもやこれほどの数とは思わなかつた。

いや、すべてがそうとは限らない。

樞憑きである詩紀ちゃんは水の魔物達にとつては総大将も同じであるから、いつぞやのように彼女が命づれば魔物達は動く。だが今回に関しては、彼女自身の意図は一切反映されていないと言つう。

七夏自身も含め多くの者は樞イコール水の魔物の総大将だとばかり思いこんでいたが、故お志摩さんが残していた研究によるならば、水の魔物の総大将は樞そのものではなくその神官のようない存在だと言う。九頭類の総帥たる彼（？）はかつて樞をその身に降ろして世界を支配していたが、ひとたび滅びた後に身体は再生したものの樞の加護を失つてしまい不完全な休眠状態にある、というものが真実だとか。その言説に従うなら、水の魔物にとつては詩紀ちゃんは新たな総大将であると同時に、かつての総大将の復活を妨害する要因でもある事になる。

となれば、水の魔物達の中にも二つの派閥が存在するだろう。

現時点での樞の巫女である詩紀ちゃんを支持し守り従おうとする者たちと、彼女を排除し本来の主を再臨させようとする者たちだ。あくまでも彼らの神である樞に従う事を優先する者たちと、同族である神官に忠誠を尽くす者たち、と言い換えても良い。どちらのグループにせよ、結界や迎撃といった妨害活動がなければ彼女の周囲に集まつくるのは想像に難くない。どちらの意図を持っていましたとしても、妨害を排除して彼女に近づくところま

での手段は共通なのだから。彼らがどれほど人間に近いメンタリティを持っているのかは分からぬが、誰がどちらの派に属しているのかは彼女の元にたどり着いてからの行動を見るまでは分からぬわけで、疑心暗鬼のようなものがあるかもしれない。人類だけに飽きたらズ異種族の揉め事の原因にまでなるとは、いかにも詩紀ちゃんらしい大物っぷりだ、と褒めたら怒られてしまつたが。

表向きには冬季スポーツ大会に付随したイベントという体裁をとつてはいるが、実際にはこの国の陰の支配者とも言える斗流新宗家のお披露目であるから、一般人はシャットアウトされており、取材のマスコミも息が掛かった者で固められている。国家の維持に責任を持つ各界の実力者達が集まつてばかりか皇位繼承権を持つ皇族も参加しており、ことによると今上帝がお忍びで参列されていてもおかしくない、そういう儀式だ。そんなところを襲撃された場合の國家運営へのダメージは計り知れないわけであるから、裏も表もこれ以上はないほどの防備が固められているが、それはとりもなおさず他の場所の防備が薄くなっている事を意味する。範囲を絞つた集中防御の態勢だ。

しかし、現に客席にはとんでもない数のバケモノが進入していく。スタジアムは百鬼夜行を通り越して、今や理解不能な混沌空間となつていた。

見た目普通の人間に見えるのはまだいい方だ。本性は悪路王やら大嶽丸クラスの巨鬼だろうか、どう見ても縮尺が狂つている連中もいて、お前のようなババアがいるか！、とでも突っ込みを入れたくなる。

遠目にはそれなりに人間っぽく見える半魚人どもはともかく、

フードの隙間から縦長の虹彩を見え隠れさせつつ不自然にふくらんだコートを引きずっている不振な連中は、蛸頭に九脚の九頭類だらうか。その一体から粘液のからみついたポップコーンの袋を差し出されたスーシのおじさんが、苦笑しつつ丁重に辞退している様子が見える。

あげく、まったくごまかす意志さえ感じられないのも。どうやつて移動してきたものかは見当もつかないが、スタンド席を五人分ほど占拠して転がっている鮫からは、皆が意図的に目を逸らしているのが明らかだ。
誰かが悲鳴を上げた瞬間にパニックが激発しそうなものだが、不思議とそとはなっていない。あまりの異常事態に、誰もが必死で気づかぬフリをしている。

身を置く世界は違えど、ここに集まっている人物達はみな何度となく修羅場をくぐってきた猛者ばかりのはずだ。これだけの密度で敵味方が混在した状態で、ひとたび揉め事が起これば大惨事。状況をそりと認めてしまった瞬間にカタストロフが起ころうることを、みな敏感に察しているのだろう。牽制と過剰な自信と自己欺瞞と冷静な判断が、吳越同舟の絶妙なバランスを保っている。つい悲鳴を上げかけた人間に對しても、周りじゅうの人々（でないものも）、しーっ、と人差し指を立てたゼスチャーでもって、声さえ挙げなければ大丈夫だと宥めに入っている。

もう一回言おう。

「なんぞこれ」

なんというか、いたたまれない。

國の急所を舞台に混沌を演出した者が居る。おそらくは意図的に防備に穴を作ることで敵を内懷深く迎え入れ、この國のおかれ

た不安定な立場のミニチュアを作り出して見せたわけだ。
そんなるくでもない事を考えつくような人間がさおりさん以外にいるとは思えないが。

薄氷を踏むような状態を可視化して偉い人たちを放り込む。ただの嫌がらせにしてはリスキーに過ぎるが、妖魅の実在と脅威を知らしめ斗流の重要性をアピールするとか、きっとそれなりに深い意味があるのだろう。どちらにせよ嫌がらせには間違いなかろうが。

しかしこれは厄介だ。

こうも混ざり合ってはいざとなつても広範囲殲滅術式は使えないし、乱戦に対してもは個々人の防御力しか意味がない。魔物達が乱戦による犠牲を厭わなければ、ジ・エンドだ。最悪の場合、詩紀ちゃんの命令で詩紀派と旧樞派の魔物達を同士討ちさせる、といふ手はあるが……とにかく詩紀ちゃんは七夏達が断固として守りきるとしても、人類側にもかなりの被害が出るのは間違いない。彼らの思考プロセスが謎なのは前述した通りだが、妖魅どもにしてもこちらに戦う意志がないことの察知や、無駄死にしたくはないって感覺ぐらいは持っているようのは幸いだ。とにかく、今は刺激しないようにするのが重要だ。こんな状況を自ら作り出しておいて何の保険も用意しないさおりさんではないから、迎撃戦力は巧みに隠蔽されているのだろう。

そこで気づいた。

儀式を進めている黒男さん以外のメンバーの姿がない。彼の妻にして神剣レーヴァティンのクロヒメである玲韻さんも、娘にしてダイインスレイフのクロヒメである睡蓮ちゃんも。それに、斗流内部でも丈司さんや大輔君が居ない。

睡蓮ちゃんの『茨の園』は一定範囲内の格下の生物を死に至らしめるし、玲韻さんの炎は九頭類だらうが蛇権だらうが人だらうが鬼だらうが構わず焼き尽くせる。アスカラロンの明日香さんは丈夫さんが手綱を放した途端に、竜種という竜種を一頭残らず根絶やしにするべく動くだらう。

エクスカリバーの絵莉華さんやデュランダルの樹菜さん、それに莫耶の萌衣ちゃんは部外者なれど斗流に協力的だし、これだけの脅威が存在すれば、斗流の指揮系統に繋がらないアメノムラクモ、それにテュルフィングも個々の判断で動くに違いない。

少しでもおかしな事になつた瞬間、スタジアムには彼女たちの広範囲殲滅攻撃が叩き付けられ、魔物の群れを参列者や自分たちごと消し去る算段になつていてるであろう事は十分想像がつく。それだけ聞くとただの自殺行為のように思えるが、クロヒメ達と尚書憑きの大輔さえ残つていればなんとかなる事を七夏は知つてい

彼女たちの干渉力を結集すれば、大輔の記憶に基づいて世界をドリフトさせることで、すべてを無かつたことに出来る。(リセットとはいっても内容は大輔の主觀に基づき、かつクロヒメ達の解釈が入るため百パーント元通りではあり得ないが……)円満解決しなかつた場合の保険としてはアリだらう。かく言う七夏も彼の記憶能力をあてにした作戦を考案した事がある。

だが、客席のかなりの部分を占める妖魅軍団に穩便にお引き取りしてもらうにはどうすればいいのか、そのとっかかりさえ見つからないところが今回の大問題だ。

「この儀式はあくまでも儀礼的なものだが、だからこそ新たな時代に相応しい趣向で執り行わせていただく」

七夏達の前、ステージ上で宣言した黒男さんが、貴賓席へと不満げな目を向けた。視線の先では、珍しくも女物のスツツ姿のさおりさんがすまし顔でふんぞり返つている。

玲韻さん達が動く事が前提になつてゐるところをみると黒男さんにも承知の上なのだろうが……このまま行けばまず百パーセントの確率でリセットが必要になる。半ば愉快犯じみた嫌がらせのために、自分の死亡さえ前提の投機的作戦を立てられる神経が分からぬ。

リセットに失敗したらどうするつもりなのかと小一時間問い合わせたいところだが、既に状況は後戻りできない段階に至つてゐる。黒男さんは何かを振り払うように何度も頭を振ると、自らの白衣の肩に手をかけ、一息に脱ぎ放つ。

「それでは、宗家争奪ファイトお、レディー・ゴー！」

白衣と袴からスパンコールスースに蝶ネクタイ姿に早変わりし、両手を突き上げて叫ぶ彼の姿は、いかにも自棄っぽく見えた。

黒男さんの宣言にあわせて何十発もの花火が打ち上げられ、紙吹雪とともに鳩が舞う。スピーカーからはド派手な音楽(ニュルンベルクのマイスターインガード)が流れ出すとともに、スタンド席には『第七十七代斗流宗家争奪戦』の横断幕が掲げられる。「まずは両チームのメンツを紹介させてもらおう。まずはあっちやんチームから、チームリーダーは新川篤史君」

「うーっす」

制服姿の篤史さんが立つて右拳を打ち振ると、三塁側から歓声と拍手があがる。篤史さん派が向こうに集まつてゐることとか。

「こんなにちは～」

同じ制服姿の結香さんが、にっこり笑ってぴらぴらと右手を振る。

篤史さんの時より若干拍手が増えたような。結香ちゃん、とか若い女性の声援も多い。しゃつちゅう部活の助つ人に回つているだけあって、同性のファンが多いようだ。

「七瀬撫菜姉」

中等部のセーラー服に身を包んだパンパンが無表情で小さく頷く。無愛想な態度はいつも通りの彼女だが、とつておきのドクロ

ペンギン眼帯を身につけているところをみると、それなりには気合いが入っているらしい。ベンベンコールの主が八佐・十二尉級の士官クラスのおじさん主体なのがいささか気になるが。

「宮藤初嬢」

「どうか皆様お見知りおきを」

クラシカルなロングスカートのメイド服の初さんが立ち上がり客席に向かって恭しく腰を折ると、盛大な拍手が起る。年齢層に関係なく男性からの安定した支持を受けているようだ。北落師門の恐ろしさを別にしても、彼女はただ優しいだけのメイドさんはないのだが。その辺、ある程度付き合いの深い人間以外には分からぬとみえる。

「のりちゃんチームのリーダー、新川詩紀姉」

彼女がすっと立つと、わき上がる大歎声と拍手、どんどんどんと床を踏みならす音と凄まじい樞コール。

くーるーるー、くーるーるー、くーるーるー！

明らかにヒトでない達からの支持に参列者達が引きまくつているのが丸わかりだが、司会の黒男さんが平然としているため誰も

突っ込むに突っ込めない様子。暴走した鬼斬りを人の技だけで相手取る肅清部隊の頭だけあって、精神の強さが半端無い。

「続いて五ヶ瀬七夏姉……もとい、七夏君」

いや、さすがの黒男さんも動搖を隠せないか。でも今更そこをまちがえないで欲しい。そしてこのナナちゃんコールはどうしたことか。男女関係なくナナちゃん呼ばわりしてくるのは勘弁していただきたいと七夏は閉口する。

「七瀬鈴菜姉」

「やーどもども。どもども。リンリン呼んでつかあさい」

ちょびと照れながら愛想を振りまく。軽薄なぐらいの陽気さは姉とは対照的だ。野太い声のリンリンコールは、主として陸奥家麾下の実戦部隊のさらに前線要員、すなわち侍頭以下のお兄さん達から発せられているようだ。

さもありなん。鬼憑きの中では扱いやすい能力を備えた七瀬の双子は苦戦中の戦場に増援として投入される事が多く、いつ何時格上の鬼と出くわすかわからない初期対応部隊にとつては騎兵隊のような存在だ。後方からの火力支援に徹するパンパンに対し、常に最前線に突入して腕力で物理的に鬼を叩き伏せていくリソリューションは、若手の鬼斬り達にとつてはあたかも勝利の女神のように見えるのだろう。

「宮藤終嬢」

「どうか皆様お見知りおきを」

初さんの時と同じような仕草に対し、同じように幅広い年齢層の男性からの支持を受ける終さん。

同じく一卵性双生児のリンベンがパツと見て相当雰囲気が違う

のに対し、宮藤の双子は髪型と長手袋が左右逆なだけで鏡写しのよう見える。だが、心底お堅い初さんに対し、終さんの方は意外にお茶目だという事が最近分かってきた。同じく、意外にいい加減な詩紀ちゃんと気が合うのも終さんの方なので、今彼女は詩紀ちゃんのチームにいる。

両チームの全メンバーの説明は終えた。しかし、これが何のイベントなのかの説明がまだだった。先ほど黒男さんは宗家争奪ファイトなどと言っていたが、あまりにも端折りすぎなので補足が必要だろう。

これは読んで字のごとく、斗流宗家の座を実力で奪い合う儀式である。

まず、斗流宗家の継承は血縁ではなく実力による、という原則がある事を確認しておきたい。第一位新川家の第一子が自動的に宗家を継承できるというわけではないということだ。

事実、十家第一位であつた壱川家が数百年間にわたって宗家を輩出してきたのは確かだが、一方で他の十家よりたびたび養子を迎えてきている。表向きは序列のある十の家から成り立つてはいても、始祖達が鬼を封じた血脉をそれぞれに引き憑いた斗流十家は全体で一つの一族のようなもの。基本的には十家の内で最も濃く血の出た人物が第一位を継いできたと言える。

壱川本家に強い鬼使いがほとんど生まれなくなつた事による指

たものだと七夏は思う。鬼の血が出なかつた人々の中には政治ゲームや蓄財にばかりうつつを抜かしている勘違い連中も多々いるとはさおりさんの弁だが、国を守る武闘集団として家柄よりも実力を優先させなければ成り立たないという現実もまた厳然として存在するということだろう。

北斗最強の星鬼とされる樞を宿している時点で、詩紀ちゃんは斗流宗家の資格を十分以上に満たしている。『白銀珠比女命』の称号で呼ばれる樞憑きは初代より数えても五組といない。

斗流から詩紀ちゃんと樞に与えられた能力評価は「無種特型超特級四度」。すなわち、封印指定をなんとか免れるだけの安定性は備えているが、およそ分類不能の怪物でどうやって使って良いかも分からぬ、とでも言つたところ。戦略兵器級の火力を備えた宮藤姉妹と『北落師門』でさえ「丙種呂型一級三度」にすぎないのだから、樞の別格ぶりが分かる。

珠坂を離れて一線を退いた新川の喜一お爺さんより宗家預かりに任じられたさおりをはじめとして、皆が詩紀ちゃんを事實上の宗家として扱っているのも当然と言える。しかし、宗家の座は正式には未だ喜一老人のところにあるのだという。

そんなある日、

「そろそろ良かるうよ」

と、喜一さんの気まぐれな一言によつて正式な宗家継承が決定したわけである。

ただ、残る問題が一つ。

篤史さん達の部屋に集まつた紫城学園学生寮の住人達と十悟さんによつて対策会議が開かれる事になつた。

「何もこんな次期にやらなくてても」

詩紀ちゃんは（当然七夏もだが）来年は受験生。ここまで引っ張ったのなら、いっそ卒業まで待つてくれても良さそうなものだ。

そう嘆息した七夏に、

「半隠居状態とはいえ、形式的には宗家サマのお達しだしね。尊重ぐらいはせざるをえないでしょう」

と、さおりさん。こんなに敬意のない部トがいて良いものか。

目の前に当人の孫が二人いるというのに。

「どうせみんな第一志望は珠大エスカレータでしょ」

と身も蓋もない。七夏達の進路調査票は第一志望が書き込み済みのうえ第二志望以下は斜線で消してあった気がするが。まあ、

他に行きたい学校があるわけではないのだが。

「とにかく、対抗馬がないと成立しないってのが問題なのよ」

談合であろうが出来レースであろうが、形式的な宗家選挙は行わねばならないという。ならばとにかく相手が必要だ。専門用語

(?)で言うところの嘘ませ犬というやつ。

だがこれまで詩紀ちゃんが無意識にやらかしてきた数々の罪状

(というのも気の毒だが)を思えば、形式的とはいえ彼女と敵対できるほど神経の太い人間はそう多くない。

「別に正式に宗家になりたくて仕方ない、ってわけではないわ。

そんなものに関係なく、私は私なのだし」

自分のことだというのに、詩紀ちゃんは至つてクール。

「残念だけど引き受けでもらうしかないのよ。色々めんどくさい

樞憑きは、簡単に逃げられない立場に祭り上げておくべきつての

が爺さんどもの意向でね。私が仕事してないみたいに見られても困るし」

「少しでいいから歯に衣着せてくださいよ、さおりさん」

この暴言にはさすがに七夏も苦言を呈さざるを得ない。

「ならいっそおまえさんがやつたらどうだ、対抗馬?」

と投げやりに十悟さん。そう言いたくなる気持ちはよく分かる。

「倒してしまっても構わん、ってわけじゃないでしょ?」

と言う言う。

「学歴・収入は言うに及ばず、容姿でも性格でも胸囲でも私が圧倒的に優位だもの」

十悟さんの渋い顔を引くまでもない。問題発言だ。詩紀ちゃんを前にここまで言える人間を他には知らない。

七夏が眼鏡属性でない分を差し引いても、さおりさんは確かに美人の分類に入るし、さほど背が高いわけはないのに出るところが出てているいわゆるトランジスター・グラマー（化石語）だが、性格的には詩紀ちゃんより遙かに問題が多い気がする。

「さあ、それはどうかしら」

いささか頬を引きつらせながら詩紀ちゃん、いや美紀ちゃんが牽制。

「私はまだ成長期だけれど、さおり姉さんはこれから萎れるだけですものね」

もう止まつてそうな気がする。というか、そこ引っかかるべき所じやないから。

「誰のせいだと思っているの?」

「返す返すも申し訳ありません」

口にしてないはずのツッコミの内容で怒られてしまった。七夏

はとりあえず頭を下げ、フォローしておくことにした。

さおりさんなら当然馬として申し分ないのは確かだが、今まさに宗家を預かって斗流を問題なく(?)切り盛りしている人間が

出馬しては、本当に支持が割れて後に禍根を残す危険性がある。

正式に詩紀ちゃんに決定した後にもさおりさんが事実上の切り盛りを続けるのもまず確定だし、いくら何でもやらせくさすぎるだろ。と述べておく。

「あとツンデレも小さいのも、僕業界では御褒美だから心配しないで」

「心配してない！」

「確かにそれは正論ね。でもどうする？」

七夏が出るにしてもあまりにもわざとらしいし、と思っていた矢先。

「俺が出るよ。対立候補として不足か？」

「了承。願つてもないわ」

退屈そうにスマホをいじりつつ煎餅などを食べていた篤史さん

が突然立候補を宣言し、さおりさんが一秒で了承した。

いや、誰であれ立候補の権利はあるのだが、格があまりにも釣り合わない場合は失笑を買う事になるだろう。能力的にも家柄的にも、篤史さんなら文句なしだ。もし詩紀ちゃんが居なければ、彼こそが次期宗家の本命として認められていた事は間違いないだろうから。

「それぞれ介添え役を三人まで選べるって事になつてるので」

可能、というのは名目であって、實際にはフルメンバーオンボーダー揃えておかないと格好つかない類だろうというのを想像に難くない。

「とりあえずナナは連れて行くとして」

了解も取らずにメンバーに入れられている、最初からそのつもりだったけど。

「とりあえず、ゆつかだろ」

その結香さんはさきほどから篤史さんの肩にもたれてく一か一寝ている。篤史さんチームも、とりあえずで事後承諾。

五ヶ瀬と遠野家から一人ずつだから、バランス的には悪くないだろう。「それだけだと七瀬と宮藤が鬱陶しいから、リンペんに初終、分かれてついてもらえる?」

介添えを出すというのは家としての支持の表明と同義だろうから、遠野家の結香さんを入れておいて両家を入れないわけにはいけない。万が一を軽んじない七瀬家は、形式だと分かっていても候補者全員に睡をつけたがるだろう。宮藤家は主筋に対しても義理を欠かすことを極端に嫌がる。苦情に先んじて手を打つ、さおりさんらしい見事な采配だ。本人達の前で各家への苦情じみた発言が無ければなお良かつたのだが。

「じいちゃんがうざくて正直すまん。じゃあ年下つてことでひとつしのりんチームに」

「一の孫です。このたびは祖父がこのよくな以下略。自動的にあつちやんチームで」

社交辞令でなくて本当にそう思つてそうなのだが、いつそう宜しくない気がした。あと正確には双子なので姉妹ではあっても同じ年。

「では同じように、私は篤史さん・終は詩紀さんチームに分かれることでよろしいでしようか?」

「……ああ、頼むわ」

「そんなところでしようね。よろしく、終、リンリソン」

そんなこんなでチームが決まったまでは良かつたが……儀式まであと一週間後に迫った日になつて、話はとんでもない方向に向

かい始める。

気はない」

まさに宣戦布告と言える篤史さんの宣言。

それに對し、ふふんと鼻で笑い。

「私は誰の挑戦でも受ける」

たところに（クーデレ＆ツンデレ反応が可愛いのでついやつてしまふ）、篤史さん達が通りかかった。

「あ、篤史さん」

七夏達に目をとめながらも足早に去っていく篤史さんの後を、

ただ事ではないと直感した七夏が追う。

「一体何があつたんですか？」

肩に手をかけて引き留めようとしたところ、一瞥もしないまま

払いのけられた。背中に目でもあるのかと思える隙のなさが、身内の七夏に向けて発揮されている。

渋々といった様子で振り向いた篤史さんは開口一番、

「おうナナ。そんな余裕かましてて大丈夫か？」

と皮肉混じりに宣つた。

「ただのセレモニーとかをくくつてるのか？ 甘いな。俺はや

るからは本気で勝ちに行かせてもらう」
何も問い合わせなかつた。篤史さんの目がこれ以上ないほど真剣であつたから。

「失礼とは承知しておりますが、不肖宮藤初、篤史さんの介添え役として全力でお手向かいさせていただきます」

「マジだぜ」

初さんとベンベンも完全にその氣で、篤史さんを守るように立ちふさがつてくる。結香さんだけはいつものごとく、ふにゃーつとしていたが。

「宗家選抜の儀式が終わるまで俺たちは敵同士だろう。馴れ合う

ことになつたと七夏は思つたものだ。

何より、篤史さんの態度が解せない。

七夏が知る限りでは、篤史さんは詩紀ちゃんが宗家となる事を当然と考えていたはずだし、時に茶化すことがあつても彼女を立てていたように思える。

今回のことにして、宗家候補を降りていたはずの篤史さんが形式的な対抗馬役を買って出たもの、と認識していたが……この豹変ぶりはどうしたことか。

儀式の上では本気での争いを演出しなければならないにしても、なにもプライベートでまで対立する必要はないはずだ。詩紀ちゃんを不安にさせて良いことなど何一つ無いのだが。

そこで詩紀ちゃんとともに篤史さんの真意を探る事にしたまでは良いが、それも不十分なままで、七夏達は今まさに決戦の場に立たされている。

……まさかここまで馬鹿げた事になるとは思いもよらなかつたが。

七夏達を含め含めて予想外の演出にとまどつている者も多いし、年嵩の参列者達は渋い顔をしているが、若手には概ねウケている模様。

伝統とかガチ無視のこういうセンスはさおりさんっぽいが、あの真面目な黒男さんにここまでさせられるということは、仕掛け人はさおりさんではなくて故お志摩さんかもしない。どちらの仕業にしても、七夏ごときに対抗できる相手ではないという意味では大差ないのだが。

「ステージごとの罰ゲームとして候補者の恥ずかしいプライベート情報を大公開予定、みんな大いに期待してくれ。さて、ファーストステージは早押しクイズだっ！」

本当にクイズをやるつもりなのも大概どうかと思うが、司会の黒男さんの台詞に聞き捨てならない一文が含まれていたような。その情報とやらがどこから提供されたものか容易く想像がつくが、考える気になれない。観客（実質的にそう呼ぶべきだろう）の異様な盛り上がり方も気に入らない。

あまりといえどあまりの展開に、詩紀ちゃんは呆れと不快感を隠そともしない。

「これで絶対に負けられなくなつたわね、ナナ」

いや、もとから負けるわけにはいかんのだけれども。
「負けたら腹いせに引っ込まくかも」

「何を？ ねえ、何を？」

「……」

沈黙が怖い！

「ボタンは個人ごとだが、お手つきはチーム全体のミスと見なし

て相手チームに解答権が移るから要注意だ」

急展開（と詩紀ちゃんの脅迫）に対応しきれず心の準備を整えられない七夏を尻目に、黒男さんは解説からの流れでいきなり出題開始。

「さつそくの第一問は故郷への愛が試される問題。珠坂市の花といえど何？」

「ボボボボーン。

二つのランプがほぼ同時に転倒する。両チームに分散している宮藤の双子が間髪入れずに解答ボタンを叩いたのだ。

「はい、わずかに早かった、宮藤初さん」

「キダチルリソウ」

「正解です。あっちゃんチーム、先制の10ポイント獲得」

奇襲に対し全く動じることなく適応している。儀式の詳細は当日まで分厚い機密のベールに囮まれ、対応のための下調べなど出来ようはずもなかつたのだから。つまりはこの二人、予備知識だけで瞬間に解答にたどり着いたのだ。

いや、彼女たちならそのぐらい容易くやってのけるだろう。大した問題ではない。

それよりもっともと奇妙なことが起こっている。捨て置けない。こと勝負事において、詩紀ちゃんが相手方に一点たりともとらせるはずがないからだ。

もともとそこまで積極的ではなかつた詩紀ちゃんだが、ああまではつきりと宣戦布告されば、勝ち気な彼女が刺激されないはずがない。

「勝つ気、あるんだよね？」

「そのつもり」

あまりにも常識的な展開に、当の詩紀ちゃんも首をひねるばかり。

偶然は常に彼女の味方のはずだ。麻雀で延々天和を連発するような圧倒的な幸運に対しては、どれほどのテクニックを有しても

いようと逆転の目はない。魂を限界まで削り合つての生死に関わるレベルのぶつかり合いならいざ知らず。たかだかゲーム程度では常に圧勝する筈の詩紀ちゃんが、わずかなりと押されている。

それは、運命や歴史の書き換え、すなわち横行ドリフトが起こつていいない事を意味する。

斗流の要である白銀珠比女命は偶然を操つて願いを叶える女神の名であり、樞憑きの巫女を現人神とみなす称号でもある。その本質は珠坂を中心にしてこの国全体に敷かれた陣を介して働く回路といえ、巫女がハブとなり人々の魂を群体化してドリフトエンジンを形成することによって成立している。

すなわち、樞の巫女の願いは自動的に叶えられるのだ。とりわけここ珠坂においては、その力はひときわ強い。

初さんの押したボタンは、それが例え百万分の一の確率であつても故障・誤動作を起こしていたはず。だが今回に限つてはなぜかそうならなかつた。

これは仮説だが、この場に限り陣を打ち消すような処置が施されているのかもしれない。そもそも主となるべき人物の選抜に用いるための場であるから、本人の身につけた能力だけで争えと言も十分あり得る話だ。

実力で勝つ正在と証明してみせよ、か。

詩紀ちゃんと目配せし合い、互いの覚悟が同じであることを確認する。

「第二問、これは基本だ。斗流十家のうち本家が現存しているのは？」

「すべて答えなさい」

「ボボボボーン。」

終 「新川・仁藤・四三・五ヶ瀬・陸奥・七瀬・宮藤」
「正解です。のりちゃんチーム、10ポイント獲得」

あれ？

「新三家の宮藤は入つて遠野は含まれないの？」

「公式にそういう事になつてているというだけで、理由までは存じ上げません」

詩紀ちゃんに問われ、答えた終さん自身が首をかしげる。宮藤の双子も事情は知らされていないようだ。

結香さんの父方の祖父母はかなり昔に亡くなっている。四年前の時点では遠野家は断絶と判断され、結香さんの生存が確認されからも回復されていないのか。さもなくば、十家は現在の結香さんの状態を生存と見なしていないのか。

考えを進めるまもなく、次の問題へ。

「第三問。斗流の主には幅広い見識が必要だ。こんなのはどうだ？ オリジナルアニメーション『指定侵入少女チカリカAD』第五話の作画監督をフルネームで答えなさい」

見識で……

ボボボボーン。

鈴菜「四不像味噌煮込みっ！」

「正解です。のりちゃんチーム、10ポイント獲得」

「第四問。戦には欠かせない武器に関する問題だ。六号戦車ティ

イガーの履帯ブロック数は片側でいくつ？」

ボボボボーン。

撫菜「94枚」

「正解です。あつちゃんチーム、10ポイント獲得」

「唖然としている間にどんどん進んでいる。リンペんの知識は相

変わらず偏っているが、役に立つこともあるんだなあと妙な感慨を抱く七夏。

以下、ほんとどうでもいいような重箱の隅問題ばかりだったが、うちのメイドさんや後輩達は規格外すぎる。二十問のうち一問たりとも取りこぼし無く、十問ずつの正解で痛み分けというのは驚異と言つていい。

「私たち何もやってないんだけれど」

「優秀な仲間に恵まれるのも主としての資質、って意味なんだろうな」

「そう言うナナも何もやってないんだけれど」

「面白い」

「次は全身全靈をかけて頑張るように」

「了解」

と安請け合いはしてみたが、次つて何をやるのだろうか？

「ファーストステージは痛み分けということで、残念ながら罰ゲームは省略」

黒衣から台本を受け取った黒男さんの少しほっとした表情からすると、罰ゲームとやらを回避できたのは幸いだったのだろう。

「さあて、セカンドステージは両チームの推薦人による応援演説だ。点数は会場からの投票をもとに振り分けるぞ。耳をかっぽじつて一言一句たりとも聞き逃すな」

応援演説と聞くと生徒会長選挙時の大騒動が思い起こされて辟易するが、考えてみればこれこそ七夏が真価を發揮できるステージだ。

「遠野結香です。篤史ちゃんはすっごいです」

結香さんの第一声。

「どの辺がどう凄いのか k w s k ! うわなにをするやめ r 「どうか静謐にお願いします」

野次をとばしたギャラリーが数人の黒衣に排除される。さすがに手回しが良い。

「篤史ちゃんは強くて優しくてかっこいいヒーローです。だからみんな篤史ちゃんが大好きです。もちろん私も大好きです。おわり」

まるつきり小学生の作文だった。これは点数つける方も困るだろう。

続いて立ち上がったのはベンベン。

「七瀬撫菜。私にとって新川篤史氏は生涯の目標の一人。喜一老の血を引き直接の薰陶を受けたサラブレッド。博覧強記にして、コレクションの質の高さは鑑定眼の確かさを物語る」

淡淡と、簡潔に端的に、彼女の目から見た篤史さんを描写する。「古典からやおいに至る幅広い見識と、初見の作品に対する的確な分析力。誰もが彼を畏敬するだろう。この国のオタク界にとつて、篤史氏は得がたい逸材と結論する。以上」

これ、ベンベン的には最大限の賛辞なんだろうなあ。

そして初さん。

「宮藤初、僭越ですが新川篤史様を批評させていただきます。失礼な物言いもあるかと思いますが、どうかご寛恕いただきたく存じます。篤史様におかれましては、戦闘能力90点、知性82点、容姿85点、協調性71点、デリカシー15点相当。私見ながら斗流宗家を務めるに十分、どうにか合格点と言つて良いかと存じます」

「点辛つ！ 容赦なつ！ 応援演説じゃないのこれ。」

「お前ら、なあ……」

味方に背中から撃たれたような状況に、さすがの篤史さんも呆然自失といった様子。

「続いてのりちゃんチームの面々にも応援してもらおう」

「終さん、お願ひ」

期待をこめた眼差しを送ると、終さんは解答席の陰でこっそりと親指を立ててくれた。彼女は姉ほど堅物ではないはずだから、詩紀ちゃんのちょっとエキセントリックなところに対しても許容してくれそうだ。そうでなくては小中高と何年もの間、付き人同然につるんでなどいられるものではないだろう。

「宮藤終、僭越ですが新川詩紀様を批評させていただきます。失礼な物言いもあるかと思いますが、どうかご寛恕いただきたく存じます。詩紀様におかれましては、篤史さんと比べて容姿が若干プラスされますが協調性がだいぶ劣ります。ただ、七夏さんのサポートがある分、斗流宗家としての適正は篤史さんより多少マシといったところかと」

ダメだった。若干大雑把になつただけで、点の辛さと容赦のなさは姉と大差ない。

この人達、普段は無闇矢鱈と僕らのことを持ち上げるけど、本当にそこまで尊敬しているのかは怪しいものだ。もしや褒め殺しの一種ではなかろうかとさえ邪推したくなる。少なくとも、幼なじみとしての友情ぐらいは感じていてくれると信じたいのだが。

「リンリノ、頼むよ」

「ほーい。しのりんのマブダチ七瀬鈴菜だよ。いやー、しのりんヤバイよ。マジでヤバイって。どのぐらいヤバイかっていうとゲロヤバでもオニヤバでも足りないぐらいとにかくヤバイ。ヤバスギ」

以下、おっそろしく感覚的で中身のない賞賛（？）が続いた。
きっと褒めてる、んだろうなあ……。

ラスト、七夏の番だ。

今のことろはどう覇負目に見ても五分と五分だろうが、ここで逆転を決めてみせると誓う。

介添え役に選んでもらえて良かつた。ここまで良いところの無かった七夏だが、詩紀ちゃんへの愛では誰にも負ける気がしない。七夏が一番上手く詩紀ちゃんを褒められるのだから。

いつそ古今和歌集とか引っ張ってきて例えるのも良いのだけど、無闇に言葉を飾るのはよそう。ストレートに、七夏自身の素朴な言葉で彼女の魅力を伝える方が良いだろう。

「五ヶ瀬七夏です。僕に少しだけ時間をください。これは皆さんのためにありますから」

これは誇張のない本音だ。

「端的に言つて、僕の詩紀さんは萌えます。この世で一番綺麗なだけでなく、性格が最高です。照れ隠しに偉そうな台詞を言つてるところをじーっと見つめてると、だんだん尻すぼみになつていつ最後には逆ギレしちゃうのとか、可愛くて可愛くてもうたまりません。いいですか、可愛いは正義です。こういう場合、萌えは唯一無二の価値基準なのです。実用性とか、世界に対する危険性がどうとか、そんなのはどれもこれも些細な問題にすぎません。だからこそ、詩紀ちゃんがどれほど可愛いらしい人なのか、彼女の魅力をぜひみんなにも知つてもらいたい。いかに立派な人物であつてもマンチョなアニキと、黙つていれば綺麗で口を開けばツンデレなお姫様と、どちらを王に戴きたいと思ひますか？ 僕から的话はそれだけです」

七夏の主張に感じ入ったのだろう。会場からはしわぶき一つ聞こえない。

手応えアリ。言つてやつたり、といったところか。

「なつなつなななななな……もぐもぐもぐもぐ」

ただ一人の例外として、真っ赤になつた詩紀ちゃん（と言うか美紀ちゃん）が何か言いたげにしているが、終さんが後ろから羽交い締めにしたうえ、リンリンが両手でもつて口を塞いでいるため身動きがとれない。打ち合わせもなしに見事な分業体制、グッジョブ。

司会の黒男さんが辺りを見回し、一步進み出た。

「これですべての応援演説が出そろつた事になるが、投票の参考として会場からのご意見をいくつか伺つておきたいと思う。発言を望む者は挙手を」

彼の言葉に応じ、観客席を埋め尽くすかのような多数の手。一部水かきがついていたり触手だつたりするが、その辺は見なかつたことにしておく。

「ふーむ、これはどうしたものかな。さおりさん、審判団の代表としてお願ひできるか?」

「了解」

ただの一睨みで会場のブーリングを抑えてから（こういうところが恐ろしい）、何度も深々と頷くと、さおりさんはこう宣つた。
「みんなの言いたいことはだいたい分かつてゐるわ」

おもむろに両チームの席に向き直つたさおりさんは、オーケス

トラの指揮者か砲兵隊の指揮官よろしく右手を高々と差し上げた。

「それでは皆さんと一緒に。せーの、」

一瞬の静寂の後。さおりさんの右手が振り下ろされると同時に、

「「「「リア充爆発しろっ!!!!」「」」ドームを怒号が埋め尽くした。

「以上よ」

全く予想外の反応だった。七夏的には完璧な応援演説ができたと自画自賛していたが、何か問題があつたのだろうか？

幼なじみ達の強い結びつきに感じ入つたのを、照れ隠し的にツンデレ表現したのだろうか。いや、きっとそうだ。そうに違いない。

「七夏さん、本当に幸せな方ですね」

終さんがしみじみ言つたとおり、七夏は幸せ者だと思う。

一度は離ればなれになつたとはいゝ、僕らの結びつきは簡単には碎かれないと、篤史さんとのぎこちなさも、この儀式が終わりさえすればきっと元通りになるはずだ。そう信じている。

「では参列者の皆、前もつて配布してある投票用紙を確認のうえ、いずれかの候補者に丸印を書き込んでくれたまえ。投票用紙はこれよりスタッフが回収するが、混乱の無いよう協力をお願いする」

十五分後。

「ただいまの投票の集計結果についてについて説明する。両候補者の得票数が僅少であったと同時に、いずれの候補者とも判断できぬ無効票あるいは棄権票が過半数に達していたため、得票に優位差はない」と判断された。審判団の協議により無効試合として両チームには機械的に50ポイントずつ振り分けることが決定された由、お伝えしておく。残念だが今回も罰ゲームは省略だ」

スタンド席を見る限りでは、字を書けないかあるいは投票の意味さえ分かつてない連中が相当混ざつてたんじやないかという感もあるが、それでも半分以上無効ってのは尋常ではない。斗

流を二つに割る争いのいずれに荷担することも耐えかねた、詩紀

ちやんも篤史さんも選ぶに選べなかつた人も多かつたのだろう。

かく言う七夏とて、斗流のリーダーとしての詩紀ちやんと篤史さんには決定的な差は見つけられない。どちらが看板になつても、組織全体としての力にそれほど差が出てくるとは思えない。各家の間に形式的な格の差があると言つても、七夏達の間柄は気の置けない友人達だ。たとえりんりんあたりが宗家を襲名したとしても、みな喜んで彼女を支えるだらうから。両チームとも無意味な罰ゲームが回避できて良かったと思うぐらいだ。

だからこそ、幼なじみ達の雰囲気をギスギスさせてまで真剣に勝ちに来ている篤史さんの真意が分からぬ。分かりたくない。仮説が当たらないことをただただ祈るだけだ。

「さて、いよいよ最終ステージだ」

と、黒男さんが宣言した。

三ステージ制だという事さえたつた今聞かされたわけであるから、この儀式のいい加減さ、ひいては斗流宗家なんて形式的立場の無意味さがよく分かる。

「なんだかんだ言つて最後にモノを言うのは実力。両候補者の個人戦闘力とチーム指揮能力のほど、見せてもらおう」

もしや、この場でどつきあいをさせる気なのだろうか。

「内容は両チームの模擬戦闘だ。勝利側には300点が加算される」

この点数割だと前二ステージは何点とっても一発逆転になる

から、一同いじられ損だ。さおりさんかお志摩さんは知らないが、考えたヒト、鬼すぎる。なにもそこまでクイズ番組然としたしな

くてもいいだろうに。連続で罰ゲームを回避できた幸運に感謝し

たい。

「時間無制限一本勝負。現状で使用可能なあらゆる装備、そしてあらゆる術式の使用が許可され、どちらかの候補者の死亡・気絶あるいはギブアップで決着とする」

それはもう全然模擬ではないと思われ。いわゆるガチバトル。もうポイントとか全然意味がない。

「参加者・参列者の安全性に関しては概略での原状回復を保証する。全力でやってもらって結構だ」

結果さえ出せれば後はドリフトで巻き戻せるようになっている、との意味なのだろう。記憶媒体となる大輔だけ安全のため隔離して中継画面でも見せてるんだろうが。あのへんの話は機密事項のはずだから、参列的には余計に心配になる説明ではなかろうか。大輔が知らない人物についてはまともに再現されずに辻褄だけあわされる可能性が十分以上にあるのだが……

そんな風に他人の心配をする余裕がある。篤史さんと戦えと言われても、今更動搖はない。こうなることはある程度予想できいたからだ、と七夏は自己分析する。きっと篤史さん達も同じだろう。

このルールなら篤史さんがどのぐらい本気なのか嫌でも分かる。いや、逆説的ではあるが、この事あるを予想したからこそ彼は本気になったのかかもしれない。

もしそうであるならば、残された手段は真っ向勝負しかないかもれない。

アリーナ席の参列者がフェンス寄りへと誘導され、スタジアムの中央部に広いスペースが作られる。

周囲に術師達が配置され、垂れ幕サイズの巨大な符を展開して

いく。このために準備されていた（おそらくお志摩さんの仕業だ）

ものであろう。多層構造の陣によって形成された高密度の防御力

場ははいかにも頼もしく見えるが、高位の鬼のもたらす破壊力に

対しては、無いよりはマシ、気休めに毛が生えた程度だろうか。

何もかもがリセット前提の書き割りのごとく感じられてならない。

防衛陣によって囲まれた空間はすなわち闘技場か。黒男さんの

指示に従い、両チームはその東西の端に別れる。

この状況、まさに対峙という言葉が相応しい。

「そういえば、これまで兄さんと喧嘩らしい喧嘩をしたことはな

かつたわね」

そんなことになる前に喜一老や市原翁、あるいはさおりさんや

お志摩さんといった大人が動いてくれたため、怪獣大決戦が避け

られてきたのに違いない。

だが今、その彼らが率先してけしかけようとしているように感

じられるのは、本当に七夏の錯覚なのだろうか。

「姉さんは私が抑えます」

「じゃあ、ベンパンを担当するね」

左翼に終さん、右翼にリンリンが立つ。向こうは右翼に初さん、左翼にベンパンの配置だ。彼女たちは自分のやるべき事を既に理解している。このメンツが決定した時点で、戦術は自ずから決まっているようなものだ。

七瀬・宮藤の双子同士の激突も初めてだろうが、お互いを知り尽くした同士。簡単に決着はつくまい。彼女たちは互いにの片割れを決戦に介入させないように拘束しあう事になるだろう。

「篤史さんと結香さんはきっとペアで動いてくるよ」「こちらも臨機応変に対応するしかないわね。期待しているわ、

ナナ」

詩紀ちゃんと七夏とで、篤史さんと結香さんを等分に警戒するのが正解だ。さもなくばたちまち裏を搔かれるだろう。

いちいちコンタクトを取り合っていては間に合わない。以心伝心の連携が試される。だが、詩紀ちゃんととの結びつきは彼らに劣るものではない。七夏はそう信じている。

「それでは、泣いても笑ってもこれで最後、最終決戦、レディー」「」「ゴオオオオーッ！」

ここは早さこそが肝要。黒男さんの宣言に呼応した皆の叫び（ノリ良すぎ）に重ねるように、最高速で呪歌を一首唱えておく。

「嗚神の少しとよみてさし曇り雨も降らぬか君を留めむ」
ベンパンが指を鳴らすと、ドームの天井付近から黒光りする鉄が落下してくる。彼女の得意の得物、対物ライフルだ。

無手のよう見せておいてこの準備の良さ。仲間内でのイベントに、怪物と戦うための大物武器を準備しているのは周到を通り越して偏執的とさえ思える。

だがこの大げさな演出は四かもしれない。篤史さんは無駄などではない。その彼は足を開いて腰を落とし、右腕を突き出している。指の間に挟まれているのは四枚のコイン。その向付けられた先には、ベンパンがライフルを手にする前に近接するべく弾丸のよう駆けるリンリンの姿。

ドンドンドンドン。
立て続けに撃ち出されたコインがリンリンの影に次々と打ち込まれては突き抜け、対側の防衛陣を大きく削っていく。星鬼『衝』の電位差発生能力を利用した電磁誘導砲だ。以前彼がお遊びでレールガンごっこをやってた時には、反動で自分がブロック

場に突っ込んだりしていたものだが、まさか改良して実戦に使つてこようとは。

互いに無手、遠距離攻撃はないと油断させておいてこれだ。高度の物理防御力を備えたリンリンを撃ち抜くことは困難でも、ライフル弾以上のエネルギーを与えられたコインを立て続けにぶつけられては速度を殺されるはずだ。対物ライフルを手にしたベンパンが、憑いた星鬼『弧矢』の力を上乗せすればリンリンの防御さえ抜けるだろう。開幕直後にリーダー自らが部下をサポートすることでバランスを崩すという作戦だ。

だが、リンリンはいっそう加速し、ベンパンに向かって突っ込んでいく。七夏が開幕直後に発動させた電磁波攪乱術式が、衝のリーダー機能の位置速度測定精度を低下させ、結果として本来は必中になるはずの攻撃の空振りを誘ったわけだ。ベンパンは対物ライフルを構える間を与えてもらえず、せっかくの武器を拳を受けるための盾にせざるを得なかつた。

しかし、そのままベンパンを倒してしまいかと思われたリンリンが一步後退する、いや、させられる。ライフルにくくりつけてあつた対人地雷が炸裂し、至近距離から多数のベアリングをまともに叩き付けられたのだ。単純な物理的な衝撃では『斧鉄』の防御陣を破ることは出来なかつたが、リンリンを押し返すことで、受けざまに投下された二丁目の対物ライフルを受け取るための貴重な一瞬を稼ぎ出したのだ。戻と予備武器まで用意してあるはなんたる周到っぷりと感心するほか無いが、それでもあの距離での戦いでは近接戦闘特化型のリンリンに分があると思いたい。あとは彼女に任せることかな。

一方、終さんと姉の初さんは引き合うかのように距離を詰めて

いく。双子間での争いでは、彼女達二人に憑いている星鬼『師門』の力を發揮する事は出来ない（あんなものを発動されても困るが）。だが、鬼憑きは基本性能で常人を圧倒している。

メイド服のスカートの中から手裏剣を取り出し、互いの眉間に喉笛・そして心臓をめがけて投擲する。その一つ一つの動作が鏡写しのように同期し、手裏剣のすべてがその道程の半ばで激突、落下する。近接してからも、苦無や警棒が一撃ごとに火花を散らし合い、連続回転蹴りが弾き合い、同種の符がぶつかり合つて相殺される。

御庭番として同じ斗流人払いの儀を納めている二人とはいえ、本気の激突の筈が完璧な約束組み手のようにしか見えない。

双子の精神感応力が師門を介したリンクを介して増強でもされているのだろうか。互いに相手の裏を搔こうとしても、すべての手の内が筒抜け、結局同じ動作にたどり着き、実力伯仲の千日戦争状態になつてゐる。言い換えれば、お互いがお互いを拘束し合つてゐる状態とも言える。なるべく誰も傷つけないで篤史さんに負けを認めてもらうには、これはかえつて都合が良いかも知れない。

ならば、残る問題は篤史さんと結香さんだ。

「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる……！」
大気の精靈の警告に従い、体を投げ出す。直後、七夏の身体のあつた位置を、黒光りする刃が通り過ぎた。

無様だとか言つてはいられない。わずかでも躊躇があれば死んでいただろ。死神の鎌のような巨大な刃は、たつぱり十五メートルは離れた結香さんのもとへと引き戻される。かつての戦で魚

人達を斬り倒しまくっていたのと同じ、結香さんの髪が変じた武器だ。

あぶない、あぶない。

正規の戦闘訓練を受けていない七夏ではどれだけ間合いをとついても安心できないと判断し、優先して発動させた警戒用術式がぎりぎり間に合った。今日の七夏は冴えている。

「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」「鍛治神が打ちて震震の父神が姫に送りしこよなしの盾」

篤史さんの得意とする衝に対応すべく、竜退治の剣である天羽々斬を端緒に嵐と雷を司る冥界の王スサノオの權能を招来。さらに、ギリシア神話にて最高の防御力を誇るアーテナの盾の加護をも加える。

想像上の神性であれ英雄であれ、あるいは人口に膾炙した伝説のマジックアイテムであれ、多数の精魂生命体によりある程度固定的なイメージを共有しているものだ。これはとりもなおさず、

精魂回路の海の中に一個の単位として存在しうる事を意味し、個性としての固有の精魂回路を備えた一個の魂と同等の在り方と言える。剣の精靈にして一人の人間でもあり單体で固有能力を發動できるクロヒメたちみたのは極端な例だが、実体のない共有幻想であっても、名と属性を媒介に回路にアクセスして仮の実体を与えてやりさえすれば、その固有術式を発動させて物質界に対する影響力を行使できる。理論的には八百万の神靈精靈を操る呪術魔術と大差ない。

信者の想像力と信仰心こそが人の域を超えた神を生みだし、神官的存在がその力を物質的恩恵として引き出す。誤解を承知で俗っぽい言い方をするならば、

信仰というのはある意味で金融システムのようなもの。しかるべきアクセス権（口座と担保）さえ用意すれば、どこの銀行からでもپرلされた金を引き出せる。

七夏に憑いている九州珠口という星鬼は、魔術的マスターキーにして自動翻訳装置にしてコマンド最適化エンジンに例えられる。各神話体系・魔術体系の専門術式を身につける必要もなく、ただ思いのままに声を掛ける感覚で、古今東西の神性でも英雄でも宝具でもアクセス対象にできる。自分で言うのも何だが、まともな術士に言わせればチート以外の何物でもないだろう。

陰陽師が人型の紙片を式神と為すように、七夏は五七五七七の短歌にのせた音波の縦波の干渉によって空気の密度差を織り上げ、召喚のための原型を作り出した。屈折率の差による陽炎の輪郭が辛うじて視認できるだけが、その中には召喚された干渉力が充満している。

半透明な武器と防具を手にした七夏は、スサノオの力を借りた疾風迅雷の踏み込みで結香さんに接敵をはかる。

「ちっ、汚ねえぞナナつ！ 何でもアリか!? お志摩さんかつての！」

篤史さんが舌打ちして毒づくが、毒づきたいのはむしろ七夏の方だ。なんというプレッシャーだろうか。ここまでやつてもまるで勝てる気がしない。せいぜいが詩紀ちゃんの足を引っ張らないで済む程度との認識だ。

七夏と篤史さんでは基本的な戦闘能力に雲泥の差がある。ライフルを持って人食いライオンに立ち向かうのを卑怯と言われても困るのだ。

確かにこちらは鬼憑きで、篤史さんは鬼使いの才能のある人間

という差はあるが、多少身体能力がブーストされている程度では決定的な差にはならない。付け焼き刃の七夏と純正の鬼斬りの篤史さんでは戦士としての格が違いすぎる。そもそも技術とは能力で勝る相手を倒すために磨き上げられた体系だ。生まれた時からの不斷の修行によって磨き上げられ完成の域に至った熟練の重みは、そう簡単に覆せるものではない。

であるからして。こと戦闘に関しては、七夏の意図など元より察知されていると見て良いだろう。暴風神の神速をもつてしても、素直に結香さんの元にたどり着かせてはもらえなかつたはずだ。しかし七夏は一人で戦っているわけではない。七夏に先んじて一步を踏み出しかけた篤史さんが踏みとどまる。その鼻先を、赤熱した金属板が通り過ぎる。

詩紀ちゃんが放ったコインだ。篤史さんと同じ、衝を降ろしての電磁誘導砲。

いかに篤史さんが衝を使うことを得意としていても、四六時中降ろしつばなしにするのは消耗が激しすぎて非現実的だ。個々の鬼を使うのに資格があるわけではないし、斗流の血の出た者なら、扱えるかどうかはともかく降ろす事は可能だ。これまで必要を感じなかつたというだけで、詩紀ちゃんなら使いこなせて当然。篤史さんの指揮で結香さんが激変するように、七夏と詩紀ちゃんにこの程度の連携は打ち合わせなしに出来る。

篤史さんが今度こそ焦りの表情を浮かべる。

これならいいけるかもしない。

彼を倒してからすべてをリセットしてもらつても、やつてもい

ない勝負の結果を聞かされた彼が納得するとは思えない。宗家が詩紀ちゃんに決定しても篤史さんが納得しなければ禍根を残す。

ならば、リセットが必要ない範囲の被害に抑えつつ、篤史さんがラギブアップを引き出すのが第一目標となる。

篤史さんを揺るがせられる可能性があるとすれば、そして七夏達の仮説が正しいとすれば。ここで狙うべきなのは結香さんだ。篤史さんの指揮下にある結香さんを捉えるのは簡単なことではないが、隙を造ることぐらいは出来る。

アテナの盾に期待したのは髪の鎌を弾ける防御力だけではない。陽炎で造られた盾の意匠の詳細の視認までは難しいが、中央に据えられた蛇女の首も再現されており、ガタソノア級とまではいかずとも石化レベルの身体拘束能力を発揮する。北斗鬼を降ろした者を石化にまで持ち込むのは難しいが、最低でも一瞬の金縛りを生むぐらいは可能だ。

「ごめん！」

弁解にさえならぬ謝罪が口をついて出た。恥ずかしい。ただの自己欺瞞だ。

英雄神スサノオの剣技が七夏の身体を動かす。かりそめの天羽々斬の抜き打ちの一撃で首を落としたが、これで動きを止められるとは思えない。刃に欠けのある十束の剣を一呼吸の間に十と六度振るうと、分断された五体が散らばる。

怪物は殺せても、相手が人の形をしていれば手を掛けるのに罪悪感を覚えるとは勝手なものだ。鬼斬りの端くれとして自らの罪から目を逸らすことなく背負わねばならない。七夏自身の戦う力は限られたものだが、結果を見届ける事ならできる。そしてゴーサインを出した責任を負うだけだ。

誰一人悲鳴を上げるものもないというのは流石と言わざるを得ないが、まだ理解が及んでいないのかもしれない。

リンペングが、そして初さん終さんが、固まっている。まさに殺し合いの最中だった筈なのに、友人の死を意識させる光景に冷静ではいられなかつたか。

いや、彼女たちを含めた誰も彼もが、理解を超えた奇妙な出来

事に目を奪われているのだ。冷静なのは七夏と詩紀ちゃん、そして篤史さんにさおりさんぐらいのものだ。

血が流れないぐらいは想定していたが……人工芝上に散つたそれは、切り裂かれた紫城学園の制服をまとつたものは、到底人体などではあり得なかつた。たとえて言うなら陶製のデッサン人形。目鼻もなければ髪も爪もない。

しかも、バラバラになつてはいても破損はない。いかに神世の名剣と戦神の剣撃といえども、斬撃にともなう手応えがなさ過ぎだつた。まるで空を切つているような感触だつた。

トカゲやカニの自切と同じだ。神剣で切断される直前に接合部

を分離し、刃をすり抜けることで破壊を免れたに違ひない。

「ばらけてる場合じやないぞ、ゆつか！」

篤史さんの叱咤に応え、人形の各パーツが宙を舞つて整列、再び人型に接合される。そして瞬き一つの後には結香さんの姿を取り戻す。先ほどからの出来事を見ていなければ、まるつきり人間になしか見えない。

「あーっ、なんで？ ノースリーブのミニになつてる！」

中身もいつもの結香さんだつた。緊迫したシーンだというのに一瞬気が抜けそうになる。

「ターンX？ ……個人の感想です。斗流としての公式見解を示すものではありません」

意外と余裕なのか、こんな事を口走るほど動搖してゐるのか、相

変わらずベンパンは読めない。
それより。

「篤史さん。説明してもらえますか」「ん、何の事だ？」

篤史さんは鼻で笑つた。少なくとも彼の態度には全く動搖がないが、ここが勝負所とさらに揺さぶりを掛ける。

「そんな姿になつた結香さんをそばに置いているのは、篤史さんが彼女の死に責任を感じているからですか」「今更斗流宗家の座にこだわつてゐるのもね」

七夏の意志をくみ取り、詩紀ちゃんも畳み掛ける。

「聞かせてください。十年前、彼女に何があつたんです」

「内容の如何によつては、宗家の座を譲ることもやぶさかではないのだけれど」

「力を合わせて斗流を担うべき僕らが、お飾りの指揮官を決めるためだけに本気で殺し合う必要があるとは思えない」

七夏達の説得を真剣な表情で聞いていた篤史さんだつたが、

「ふつふつふつふ、ははははははは」

と乾いた笑い声を上げ、

「甘い、甘いぞ。だからお前らはアホなんだ。なつちやあいない、本当になつちやいないな！」

と、白い歯を剥き出しにて咲笑する。

「いいだろう。聞かせてやるよ、俺の罪を。十年前の赤ヶ谷第一ダム崩壊、覚えてるか？」

質が悪いコンクリートで建設された古いダムが水圧に耐えかねて自己崩壊し、河川敷にいた数十人が急な増水に巻き込まれて亡くなつた事件があつた。

結香さんとその家族はそのダム事故で行方不明となり、死亡認定された事になっている。

「あの原因は手抜き工事なんかじゃない。俺が樞の制御に失敗したんだよ」

あんんですけど?

完全に予想外のとんでもないことを言い出した。

「樞に乗っ取られた俺が何もかも喰つちましたんだ。ダムも、ゆづかも、家族も。バクンバリバリってな」

冗談……ではなさそうだ。

彼の発言が真実ならば、七夏と詩紀ちゃんの立てたいすれの仮説にも含まれない予想外のファクターだ。あまりにもあり得ないため、無意識に可能性を排除してしまっていたかも知れない。使えない、わけではないのだから。

確かに樞は詩紀ちゃんに憑いているが……他の何者かによつて使役されている最中でさえなければ、フリーの鬼の固有能力は才能のあるものなら誰にでも引き出せる。それと同様に、憑いていても眠つている鬼を使うのと大差ないはずだ。

ただし、扱いきれるかどうかは全く別問題。樞は現時点では眠つているが、それでなお詩紀ちゃん達にあれだけのドリフト能力を与えるほどの恐ろしく強大な鬼だ。斗流の歴史上で樞憑きは詩紀美紀を含めてわずか三組六名に過ぎず、樞固有能力まで使いこなせた者は居ない。

そんなものを暴走させつゝも篤史さんは生き残っている。その事実が、彼の卓越した才能を示しているとも言えないだろうか。

「なんで、そんなことを？ 何のために？」

問う声が震えるのが七夏自身にも分かった。

「好きこのんでこんなものを使おうだなんて、どうかしてるとしか言いようがないわね」

お世辞にも豊かとは言えない胸に手を当て、詩紀ちゃんが眉をひそめる。心底理解できない、といった表情だ。

「……お前らには本当に分からいいんだな。羨ましいよ」

篤史さんは両手を広げ、ぐるりと一回転して観客席を示す。「ほとんどの人は分かってくれるだろうな。身に覚えもない事で慰められる屈辱感ってやつを」

ぱらぱらと聞こえる拍手、「分かるぞー」の声。

「斗流を継ぐことになんて興味なかつたし、才能のある詩紀が継ぐのが当然だと思ってた。でもな、俺はいつもこう言われ続けてたんだよ。『どこの馬の骨ともしれない義理の妹の下につかされるなんて氣の毒に』『悔しいだろうが我慢してくれ』『斗流の未来のため屈辱に耐えてくれ』ってな。」

「そんな小さな人間だと思われていた、そっちの方がよっぽど屈辱だった。でもそれ以上に我慢ならなかつたのが、ゆつかに対する態度だったよ。」

『結香ちゃんもいつまでも篤史君にくつづいてると損するぞ』って言われたあいつが懸命に反論しているのを見た時、ゆつかに感謝すると同時に自分の情けなさに腹が立つた』

えへへ、と頭を搔き、結香さんは子供っぽく照れる。

『尊敬されるに値する人間であることを証明しなきやならなかつた。俺を支持してくれるゆつかと、それにおじさんおばさんに見せるため、ダム湖で樞の一部なりと招来してみせようとした。その結果がこのざまだ』

と、篤史さんは肩をすくめる。

「俺は一度大負けして、高価すぎる代償を支払ってしまった。宗家になつたからって取り戻せるものじゃないが、ゆつかが守つてくれようとしたプライドを少しごらいは回収したいじゃないか。あいつが無駄死にでなかつた事の証明になるかは分からぬけどな」

「それが篤史さんの誠意なんですね」

「ただのこだわりだ。ばかばかしい話さ。笑いたければ好きなだけ笑つてくれ」

七夏なりの解釈に、篤史さんは自嘲的な笑いを返す。

「それ、全然笑えませんよ」

「兄さんの考えは概ね理解したわ。到底納得出来るものではないけれどね」

それなら自分がリセットしてやろう、とか言い出さないのは詩紀ちゃんなりの優しさなのだろう。

「で、あれはやっぱりお志摩さんの仕業なの？」

「ああ、高位の鬼を憑かせて使役するためのヒトガタだよ。矢車の倉にあったそうだ。自分がゆつかだなんて言い出したのは、何

もかも無かつたことにしたいっていう俺の弱い心の反映なんだらうな。こそ、情けないぜ」

篤史さんの言葉を脳内で反芻する。

……！

何と言ふことだらうか。

「この人は馬鹿だ。大馬鹿者だ。察しが悪いにもほどがある。『リンペソ、初終！』とにかく手を貸しなさい！このバカ兄貴

を止めるわよ！」

詩紀ちゃんも同じ思いなのだろう。

「いえ、でも私たちは今は篤史さんの……」

「チームメイト」

状況を理解しきれていない初さんとベンベンを、七夏は怒鳴りつけた。

「心得違いの思いこみで斗流の敵になろうとしてる幼なじみを、僕らが止めなくて誰が止めるんだよっ！」

「はっ、はいっ！」

「……了解した。お手向かいさせていただきますぞ、篤史ちゃん」

その様子を見て、肩を振るわせて笑う篤史さん。

「説得による敵戦力の取り込みか。確かにルール範囲内だ。普通ならギブアップを宣言するところだらうな」

「これで六対二です。ここは武器を引いて、腹を割つて話し合いと行きませんか」

「甘いと言つたろう。俺は斗流どころか人類の敵になることも辞さないつもりなんだ」

「……マジ？」

勘の良いベンベンが身震いする。

「今ならうまくやれるかもしれない気がしないでもないような、そうでもないようでもあるしな」

「こらー、そんな適当な根拠で無茶すんなー！」

リンリンの抗議を意に介さず。篤史さんは右手を高々と差し上げる。

「詩紀、お前が真に宗家の器だと言うのなら見事この俺を止めてみせろ！ 来おいつ！ 樞うううつ！」

篤史さんが指を鳴らすと、彼を取り巻くように地面が六カ所で盛り上がりはじめる。

ドームの屋上に届きそうな高さの、塔のような何かが人工芝を貫いて立った。根本の直径は一抱えでは足りないだろう。絵の具を洗った後のようない何とも言えない色合いの水で形成されたそれは、次の瞬間にやりと曲がって鍔首をもたげる。それではじめて、それらが巨大な触手である事が理解できた。

表面には大小さまざまな吸盤が並んでいる。吸盤に根本に柄のあるもの、無いもの、縁に小さな牙が並んでいるもの、中心に大きな爪が生えているものなど、統一感がない。一見すると頭足類のそれに近いが、吸盤の配列や太さの異常なバランスは不安感を喚起させ、とても世の常の生き物の一部とは思えない。それらの放つ瘴気としか言いようがない何かが、魂に直に脅威を伝えてくる。

身だけを使つたのだろう。おそらく彼はその場を動けないが、そんなものがどれほどのハンデになるとも思えない。
集まる視線に、詩紀ちゃんが無言で頷く。あれが樞の力の発動だというのは間違いなさそうだ。七夏の術でも、詩紀ちゃん中の星鬼の魂が活性化しているのが確認できる。が、そんな方法で確認するまでもない。

触手の一本が先端に雷をまとい、別の一本が先端に炎をまとい、また別の一本が先端に光球を宿す。結香さんの髪のように刃状に変じるものもある。

本体までは実体化していないが、間接的に他の北斗七鬼の力を引き出しているのであるから、北斗の頭たる樞に間違いない。

「手始めに、お客達にちょっと怖い目にあつていただこうか。それで俺の力は納得してもらえるだろうしな」

触手の一本よりレフトスタンンドに向けて紫電が逆り、爆発を起こす。悲鳴と怒号が上がる。

「ん？ 意外に丈夫だな。ちよいと手加減しすぎたか？ いや、ちようど良いか」

スタンドの壁は崩れたが、客席に被害はなさそうだった。客席の防御力場が意外に健闘しているのは嬉しい誤算だ。さすがお志摩さん印。

「おう、詩紀にナナ。こんな事をやる人間に宗家の座を与えておいて良いのか？ んー？」

篤史さんは挑発的に右手をあおぎ、手招きしてみせる。
彼にしてみれば、全力の詩紀ちゃんを圧倒しないと勝つたことにならないのだろう。

「次は何十人か死ぬぞ」

観客席のバケモノ達の一部がイアイアとか嫌な感じの歎声を上げているが、精神防御の訓練を受けている斗流の人間はともかく、一般人の正気度がどのぐらい保つかが気になるところだ。陣のフィルタリングはアテになるのだろうか。

まあ、そこらへんはさおりさんや黒男さんや十悟さんあたりが上手いこと処理してくれるだろう。直接対峙する七夏達はそれどころではない。

「俺は人間をやめるぞ、詩紀！」

ことこの状況に至つて無意識にネタを口走る篤史さん。業が深い。

そのズボンの裾が裂け、隙間から滑り出た何かが地面に潜り込んでいるのが見える。過去の苦い経験を生かし、樞の招来に下半

今の篤史さんはすべてを捨てて掛かっている。一度実力で打ちのめしてからでないと、話し合いにもならない。

「樞の制御を奪い返すわ。防御をお願い」

つまり正攻法だ。

詩紀ちゃんにしてみれば樞はいつ何時取り込まれるかわからぬ危険な相手であるから、彼女は常に刺激しないようにと努めている。それを篤史さんとの間で綱引きしようというのだ。下手をうつて覚醒させればどれほどの規模の破壊が起こるかわからないが、ここは彼女に賭けるしかない。

六種の攻撃属性は、七夏が中心となって呪術で抑制する。先ほどまでの攻防で精神力をかなり消耗しているのと、篤史さんの扱う樞の全力がどのぐらいになるのかが分からぬ（少なくとも七夏の術以下って事はないだろうが）のが問題だが。

篤史さんの氣を逸らして詩紀ちゃんを援護するには攻撃も行いたいところだが、北落師門は強力すぎて問題外。篤史さんごと、スタジアムの半分と参列者、近くの街の二つ三つと山一つぐらいはまとめて消し去ってしまうだろう。これは最後の手段だ。

あとは肉薄しての攻撃あるいは狙撃だが、オールレンジ対応可能な結香さんに守られた篤史さんに守られている以上、容易い話ではない。しかも、下手に制御を失わせては樞の暴走の原因になりかねない。薄氷を踏むようなぎりぎりのせめぎ合いになるだろう。

十年前は新川老や市川翁が現役でお志摩さんも健在だったが、

今回は詩紀ちゃんを中心になって收拾せねばならない。まさに宗家候補に相応しい試験と言えた。皮肉なものだ。

「……なんとかしないとね」

「どうやつて？」

「根性、かしら」

「同感」

いつも合理的な宮藤の双子が力業の精神論という結論に達している。

「肉体言語で説得するから、ベンベン達は援護お願ひ」

「了解」

三人が援護してリンリンを突入させるつもりなのだろう。

「詩紀いいい！」

「兄さああん！」

篤史さんと詩紀ちゃんの間で凄まじいまでの気合いが交差し、樞の主導権を奪い合う。

六本の触手からほとばしる光線、電撃、炎、衝撃波、大岩、刃。七夏は五行を拡張した六種の術式を同時に展開し、可能な限り迎撃する。属性の相克を利用しても捕捉できた一部を打ち消すのがギリギリでだが、やらないよりはマシだろう。

二組の双子が突入するが、全身を動的に武器防具に変えて篤史さんを守る結香さんをなかなか突破できない。

この状況に至っても、スタジアムを包囲して居るであろうクロヒメ達はまだ動き出さない。七夏達が状況を收拾することに期待してくれているのだろう。彼女たちが諦めてご破算に動き始めたいうちに決着をつけねばならないが、いつまで待ってくれるものか。気ばかりが焦る。

こんな事を続けていては七夏の精神力が最初に尽きる。そうなれば雪崩れるように敗北が決定するだろう。

「貧弱貧弱！ 無駄、無駄、無駄あ！」

篤史さんがまたやつてる。ほんとに業が深い。

「自分の野心のために禁呪に手を出すような悪者の俺にさえ勝てないで、斗流宗家を継ごうとは片腹痛いわ！」

「うっさい黙りなさいよ、このバカ兄貴！ 勝手にひがんで勝手に自滅してちや世話無いわ！」

詩紀ちゃんのすました態度もだいぶ崩れてきた。篤史さん相手に美紀ちゃんが出てきてる。

しかし、状況は芳しくない。

同時行使に伴う精神力の急激な消耗に従い、術式の力がだいぶ弱ってきてるのが実感される。このままでは攻撃を打ち消しきれなくなるのも時間の問題だ。

だが、そとはならない。

おかしい。

そもそも、七夏に凌げる程度の攻撃力では、不完全とはいえ樞の顕現としてはあまりにも貧弱すぎる。意識的か無意識にかはわからないが、篤史さんが手加減しているのだろうか。そうだとすればまだ説得に期待が持てるのだが。

おかしい。

客席を守る陣の防御力もあまりにも高すぎる。七夏が一撃一撃に集中して辛うじて受けられている攻撃から広範囲をほぼ完全に守りきっている。

おかしい。

篤史さんの指揮下にある結香さんは防御に徹し、四人がかりの攻撃を完全に抑えきっている。お志摩さんの手になるヒトガタと星鬼権の力は実に凄まじい。あれほどの力をもつてすれば攻撃に転じる隙がないわけでもないだろうに。

おかしい。

樞はもともとは詩紀ちゃんに憑いてる。刺激で樞を目覚めさせてしまふリスクこそあるが、彼女がその気になればいつでも奪い返せたはずだ。なぜかそれが出来ていない。タイズの時ドリフトが起こらなかつたのと同様、詩紀ちゃんの能力を制限するような細工がこの場にほどこされているためと七夏は解釈していたが、もしかするとずっと勘違いしていたのではないか。

そして確信する。

詩紀ちゃんだ。

彼女は自分自身のためのドリフトを抑制し、一方で樞の奪還に回すべき力を割いてまで参列者の被害をガードしている。それも無意識の間に。さもなくば樞の触手の出現だけでも大多数の参列者を発狂させるに十分だったはずだ。

あの詩紀ちゃんが、か。彼女も確実に成長していると知つて、嬉しくなってきた。

それに、篤史さんもだ。

「ナナ、何がおかしい！ 真面目にやれ！」

「篤史さんこそ。これが笑わずにいられますか」

七夏がすべての防御術式を停止する。それに呼応したかのようには、樞の触手からの攻撃がびたりと止む。

結香さんが完全に人の姿に戻ったのを確認し、二組の双子も手を止める。

「ん、なぜだ？ なぜ言うことを聞かない!?」

篤史さんは叱咤するが、萎れて人工芝の上にとぐろを巻いた触手はどれ一つとして動こうとしない。

「本当は誰も傷つけたいとは思つてないからですよ」

彼の態度ときたら、自分を倒してくれと言わんばかりではないか。

「篤史さんはもう諦めたかった、そして誰かに罰して欲しかったんでしょう？ 身内だろうと手加減せずにたきつぶして、詩紀ちゃんこそが宗家に相応しいと証明して。たとえ樞を呼び出したところで、絶対に詩紀ちゃんには勝てなかつたって事実が欲しかつたんだ」

兄妹揃つて偽悪的で内罰的。弱つたものだ。

「……そうかもしれん。だが、俺が戦わずして負けを認めてしまつたら、俺を信じて付いてくれたあいつの死が無駄になつちまう」

「その気持ちは分からなくもありませんけどね。前提条件がおかしいんですよね」

「はあ？」

「篤史さん、一番大事なことを勘違いしてますよ」

七夏は人形、いや結香さんを指さし、言った。

「篤史さんの知る結香さんは、今でも篤史さんのそばにいます。それを生きていると言つて良いのならですが、お志摩さんの生人形なら人間と変わりませんよ」

結香さんは篤史さんに向かって、にっこり、とゆるい笑いを返すと、小さく手を振つた。

「……！」

数秒かかつてようやく意味を理解した篤史さんは、何度も何度も首を振りながら否定しようとする。

「いや、そんなはずはない。あれは星鬼の、^{はがり}権の擬態にすぎないぞ」

篤史さんにしてみれば安易に誘惑に飛びつけないだろう。希望的観測など結局自分をより傷つけるだけのものになりかねないのだから。肯定的な言葉一つで簡単に信じていいようなものではない。

だが。冷静に考えをめぐらせてみるならば、証拠などいくつもあるものだ。

「罪を認められない弱い心が逃げ場として偽の結香さんの人格を作り出してしまつた、とでも思いこみたかつたんでしようけどね。僕が見る限り、そのヒトガタは結香さんの魂を納めるべく最適化されていますよ。人形に変化の鬼を憑かせて人の身体の代用にするなんて、いかにもお志摩さんがやりそうなことじやないです。復活直後は七歳のままの彼女だったかもしれません、それから成長、篤史さんなら感じとれるはずですよ」

七夏が詩紀ちゃんのささやかだが着実な成長を喜べるように。

「それに、憑いた星鬼の異能を発揮できるということ自体が、人としての魂が備わっている証拠じゃありませんか。そこに気づかなかつたってのは篤史さんとしては迂闊だと思いますけど、さすがの篤史さんも身内のことで頭が回りませんでしたかね」

そしてだめ押し。

「さらにもう一つの証拠は、今の結香さんが篤史さんの記憶の中の彼女さんではなく、篤史さんの初恋の人である野口先生の姿を備えているって点です。まさに結香さん本人の意志の反映でしかあり得ませんよ。例え自分が自分でなくなつても構わないから、篤史さんに好きになつて欲しいなんて。いやあ、お熱いですね」

「な、おまつ!? え」

皆、嫌な笑みを浮かべつつ、得心したように頷いている。

「納得するなよお前ら。って言うか、なんで気づいてんだよ！」

わからいでか。

当時高校生だった野口紹咲子先生を見る篤史さんの目は憧れにキラキラしていたものだ。あれで誰にも気づかれていないと思つていたとは恐れ入る。

「……参った。いや、いちいちナナの言う通りだ。昨年のこいつ

はほんとうにあの頃の、ガキンチヨそのものだったからな。これでもだいぶ年齢相応になつたんだぜ……」

はあああああ、と大きく長いため息をつき。

「俺としたことが、何やってたんだろうな」

それから篤史さんは詩紀ちゃんに向き直る。

「樞を返す。なんとかして暴走を抑えてみせろ。できるな？」詩

彼は既に、厳しくも頼もしい兄としての顔を取り戻していた。

「それが私の役目だから」

〔合格だ〕

篤史さんが頷くとともに、六本の触手が地面に引き込まれてい

く。同時に膝が落ちる。彼の髪は白く変じ、樞招来に伴う消耗の激しさを物語っていた。

眉を寄せ歯を食いしばる詩紀ちゃん。七夏はその左手を取る。

「頑張れ、詩紀ちゃんに美紀ちゃん。僕がついてる」

「邪魔しないで、私一人で十分よ」

相変わらずきついが、これが照れ隠しの感謝の表現だという

のは学習済みだ。

ほどなく彼女は身体の力を抜く。ふう、と大きく一息つくと、

から」

ウインクとともに右の親指を立ててみせた。
人工芝に身を横たえた白髪の篤史さんは、その様子を見て満足げに言うと、

「よくやった、それでこそ斗流宗家……ガクリ」

わざとらしく目を閉じ、首を落とした。どう見ても死んだふり。散々皆に迷惑を掛けたあげく最後までこれとは、つくづく業が深い。

「ただいまの新川篤史君の発言、ギブアップ宣言と見なしても構わないか？」

そこはかとない笑みを浮かべながら、審判役の黒男さんが言った。

「ああ。完敗だ」

しばしの気まずい沈黙の後、不承不承といった様子で篤史さんが応える。ほらやつぱり生きてた。

「よろしい。これをもつて、最終ステージの勝者はのりちゃんチームと決定。同チームに300点加算により、総合優勝はのりちゃんチーム、従つて斗流宗家の継承権は新川詩紀嬢とあいなつた。

皆、勝者にも敗者にも盛大な拍手を！」

万雷の拍手に、詩紀コールと篤史コール。

そして、べたべた言う濡れた音の拍手、イアイアコールに樞コールが気になつて仕方ない。

「さて、他でもない罰ゲームの件だが」

「あるんかよ！」

がばっ、と身を起こした篤史さんが抗議する。

「勘弁してくれよ、もう恥ずかしいネタは暴露されちまつたんだ

のは学習済みだ。

51

「その意見ももつともだな。なら別のを考えるか。そうだな、カオスな参列者席の收拾方法を考えるよう、ってのはどうだ？」

黒男さんの裁きは見事なものだった。

主である樞を宿した詩紀ちゃんの宗家就任に興奮の頂点に達したバケモノ達は、いまにも暴徒化しそうな勢いだ。詩紀ちゃんを

主と見なす現状追認稳健派と彼女を排除しようとする原理主義過激派の激突も時間の問題。罰ゲームでなくともみんなで知恵を絞つて考えねばならないだろう。

死人を出さずに上手いことやったのに、今更クロヒメ達にリセットされてもたまらないし。

「よっしゃ詩紀、歌え！」

「はあ？」

『寮に帰ると必ず後輩が惨殺されます』でもなんでもいい。

家に帰りたくなるようなやつをひたすら歌い続ける。名付けて民明書房計画』

さすがは篤史さん。計画名はともかく、見事なアイディアだ。

ここならPAシステムも完備だ。スタジアム全体にくまなく呪歌を届けられる。

攻撃ではないから無意識に手加減する心配もない。

「……やるの、本当に？」

「斗流宗家としての初仕事だよね。頑張って」

もう、歌えばいいのでしょうか、歌えば！ ナナの笑顔は暴力と一緒になのよ。法律で規制が必要だわ』

詩紀ちゃんはなおもぶつぶつ言っていたが、客席の状況を見るときさすがに覚悟を決めたようだ。

「はいマイクです」

「回線繋がりました。カラオケもいつでも対応できます」さすがは宮藤姉妹、察しが良くて準備が早い。メイドマスターを目指しているだけはある。

「分かった、分かりました。こうなつたら歌つてやろうじゃあないの！」

美紀ちゃんはだいぶ自棄になつていて模様。

「いいないいなおうちに帰ろ♪♪

歌が響き始めるとともに、スタジアム内の人の流れが変わる。

ヒトも、ヒトとは呼べないモノ達も。ソワソワしつつも整然と列をなし、出口に向かつて動き始める。

いつか十悟兄さんが巻舌に李白の静夜思をのせて魚人を追い返した事があるが、あれを超強力にパワーアップさせた感じだ。

その後も揉め事らしい揉め事は起こらない。肅々と退去が進んでいく。

「カラスどうして泣くの♪♪

詩紀ちゃんにも最初は躊躇があつたが、だんだん調子が出てくる。

ふだん危なつかしくて普通に歌えないだけに、思いつきり歌が歌えるのが嬉しくて仕方ないのだろう。帰宅ソング縛りでも。

言靈使いの本職として、詩紀ちゃんを援護すべく七夏も唱和することにする。だいぶ精神力を消耗しているから、あまり役には立てないかもしれないが。

「遠いお山に陽が沈んで♪♪

「ホームホエアマイラブダイズウェイティング♪♪

「闇に隠れて生活♪♪

「いやそれ違うから。それにもうみんな帰っちゃったよ」

魔物どころか会場スタッフの一人も残っていないが、現場の後片付けまでは責任もてない。

さおりさん達の姿まで無いのには納得いかないが、あとで精々面倒かけさせてもらおう。今回の騒ぎもどうせあの人青写真なんだろうし。

「なんでナナ残つてるの？」

「僕には帰つてほしくないって思つてたでしょ？ 効くはずがないよ」

「そういうこつ恥ずかしい物言いをするなど何度言つたら！」

実際には詩紀ちゃんの呪歌に抵抗するのはなかなか骨が折れたが、黙つておこう。抵抗できたってこと 자체が普通じゃないのだから。

どうやつて帰るか考えてなかつたが、彼女と一緒に歩いて帰るのもオツだろう。

「足がいるわね。さて何を喚ぼうかしら。だいぶ子分も増えたしね」

「こちらこちら」

バケモノとかタクシーにしちゃだめだろう。

詩紀ちゃんが正式に斗流宗家を継いだとはい、七夏達の生活は大して代わり映えしなかつた。

だが、いくつかの小さな変化は確かにあった。

後日談その一。

一部とはいえ樞を実体化という無茶苦茶をやつた篤史さん。消

耗のため三日三晩足が立たなかつたとのことだが、むしろその回復の早さには驚くしかない。さすがに白髪が治るまでには半年ほどかかった模様だが。

一方、篤史さんから妄想の産物と思われていた事が発覚した結香さん。さすがの彼女も腹に据えかねたらしく。篤史さんは丸一日の間、口をきいてもらえなかつたそな。たつた一日のストライキでは大した効果もなさそなだが、結香さんの方が我慢できなかつたのだろう、きっと。

ごちそうさま。

さらに後日談その二。

今回のバカ騒ぎには案の定さおりさんが一枚噛んでいた。詩紀ちゃんが問い合わせたところ、篤史さんの抱えていた葛藤も勘違いも何もかも承知の上で、彼が参戦するのも爆発するのも計算の内だつたようだから、相も変わらずの悪辣さである。

だが、がさしもの彼女も樞の登場までは計算外だつたとみえる。表の世界の重鎮達に斗流宗家クラスの実力を見せつけて適当にプレッシャーを掛けておきたかつたのだろうが、必要以上に震え上がらせてしまつたらしい。後片付けは物理面でも精神面でも相当手が掛かつたに違ひない。

手が掛かつたに違ひない。

そして後日談その三。

宗家継承より一週間ほど後より、寮や学校の周りを数匹のバケモノがうろつくようになった。正確に言えば猿人間っぽいのと猪人間っぽいのと魚人の三体。とつ捕まえた七夏が北落師門の通訳

能力を借りて尋問してみると、樞を信仰する各種族を代表しての
メッセンジャー兼押しかけ用心棒志願と判明した。

当然のように大紛糾となつたが、詩紀ちゃんが大幅に強化された発言力を最大限に利用して（横車を押しまくつたとも言う）強引に彼らの受け入れを決めた。そればかりか、それぞれ大聖・元帥・大将の称号を与えられた彼らは、宮藤の双子の管理下に置かれつゝも詩紀ちゃんの傍近く仕えることになってしまった。宗家が初仕事で斗流の本拠地にバケモノを呼び込んで常時居座らせるなど、自分で身を守るだけの力を持たない文官達は発狂ものだろう。

かく言う七夏とてこの馬鹿げた選択にデメリットを上回るメリットがあるとは思えないし、単なる嫌がらせのような気がしないでもない。斗流のためにもこの国のためにもならぬ人物を率先して擁立し、あろうことか宗家に据えてしまつた、という可能性も十分以上にあるのだが……そんな事は瑣事に過ぎない。

篤史さんはただ結香さんの鎮魂のためだけに妹を敵に回し、さらには國を危険にさらすことさえやつてのけた。ならば七夏は、世界の存亡を天秤に掛けてでも詩紀ちゃんを支持し続けると誓おう。篤史さん以上に覇気がないと酷評される七夏にだつて、このぐらいの負けん気はあるところを見せておかないと。大切な彼女に見捨てられないように。

切り札はキュートなあなた

Fukapon

「あの、これ、どういう……？」

己の衣服を確認した。

上半身は黒から白に変わり、下半身は、肌色が覗いている。

白いセーラー服を纏い、膝丈のスカートを穿いていた。

「用のない生徒はとつとと帰りなさい」
振り返った男子生徒の表情からは、驚いた様子が見て取れた。

視線の先では、笑みを浮かべた女性が言葉を続ける。

「だいたい図書室は本を読みに来るところよ。あなた、何してたの？」

驚きからうろたえへと表情を変える男子生徒に、彼女は視線を絡める。さらに不敵な表情を声にも載せて核心を突いた。

「物陰から女の子を覗くなんて趣味が悪いわ」

「そ、そんな……」

「言い訳なんて男らしくないわよ。尤も、君の強みはそこだけどね」

彼女は完璧なウインクを決めて、ムッチリとした身体を彼にぐいと寄せた。

ボディラインを露わにするラテックスのスースが、彼女が学校

関係者でないことを物語っていた。
いつもの彼だったら、その違和感を口に出して指摘したかも知れない。しかし今は、彼女のなすがまま。

「おとなしくしてなさい。すぐに素敵になれるわ」

小さく甘い囁きとともに、彼女は慣れた手つきで、彼の制服のボタンに手を掛ける。

そして十分足らずの後、図書室には甲高い声が響き渡った。
「あははははー、よく似合ってるよー」

甘い妄想は、女子生徒に声を掛けられた己が、女装した男子生徒であることを忘れさせたようだ。彼は事もなげに答えながら、

顔を上げた。

「済みません。大丈夫で……す……！」

そして、別の非常事態には気付いた。

目の前にいたのは裏庭を清掃していた女子生徒、瀬川星凜だったのだ。

驚いたのは彼だけではない。星凜も非常、元い異常事態に声をうわずらせた。

「岸田、くん？」

「せ、瀬川先輩っ！」

舞い上がるがつた彼に、彼女の怪訝な表情に気付けといふのは酷な注文だろう。

しかし気付かぬ現実はもつと過酷だ。星凜はためらいがちに、

少し遠回しに告げた。

「えっと、趣味なのかな？」

「何がですか？」

「……女装」

「あ、あああああああああ！」

前門の虎、後門の狼。

一難去つてまた一難という本来の意味でも、後ろの門が閉じられているという文字通りの意味でも。

「いいやいやああ違う違う、違うから！」

大慌てで背後の引き戸を開けようとするも、ピクリとも動かない。

引きつる笑顔の少女と、引き戸に縋り付く美少女。一人の初め

ての会話はだいぶ変わったシチュエーションで始まった。

「いいよいよ。趣味は人それぞれだもん」

「違うんです。今、図書室で——」

もちろん会話の内容も普通じゃない。男の娘と化した彼、岸田

孝太郎は図書室での、知らない女性との出来事を一所懸命に説明する。

彼自身ですら信じてもらえないだろうと思つた説明に、彼女はケロッとした反応だつた。

「そつか。災難だつたね」

ありきたりな言葉を返した彼女に、孝太郎は見とれた。訝しげな表情はすっかり消え、憧れの笑顔そのものが彼に向かられたのだ。悪夢から一転、夢のような時間はまだ終わらない。

「でもせつからく可愛くなつたんだから、お出かけしよっか」「えつ？」

「デートしよ？ 嫌かな？」

「は、はい……」

へなへなどへたり込む彼に、彼女は再び、手を差し伸べた。

クリスマス直前、煌びやかな街の中を腕組んで歩く二人。カップルか、女の子同士か。いずれにせよ、二人は見事に溶け込んでいる。

「こーちゃん、可愛いんだから堂々と胸張つて

「そ、そんなこと言われましても……」

「あーん、仕草すら可愛いなんてずるい」

寒空の下、コートを着て制服を隠してもなお男の娘を保つ彼に、星凜はいたずら心を忘れて舌を巻いた。

「こーちゃんは何でもできるんだね」

ふと口をついて出た言葉は、孝太郎の注意を引くにも十分なほど影があった。

「せが——星凜、先輩？」

「私がこーちゃんを知っていたの、同じ美化委員だからってだけじゃないの」

「えつ、そうなんですか？」

「本人は気付かないんだろうけどさ、有名人だもん。一年生の天才くん」

「ああ……」

入学以来、定期試験で「完全試合」を続いている彼の異名。今ではもちろん、本人の耳にも届いていた。

星凜も知っていて当然だと彼が気付かなかつたのは、天才くんにも苦手はあるからだろう。今やそのことに気付いた彼女たちのオモチャだ。

「いいわ、教えてあげる。こーちゃんがどんな子なのかをね。いらっしゃい」

二人は星凜が腕を引く形で、近くにあつた駅ビルへと入つた。急な暖かさに彼の眼鏡が曇り気味だつたが、ぴつたりとガイドする彼女は歩みを緩めない。

ツカツカと売り場を突つ切り、星凜はドアを一枚押し開けた。

「——！」

「さすがは天才くん。声を出せないってわかってるのね」

声にならない悲鳴を上げた孝太郎を、星凜は鏡の前に押し出した。

「ねえ、見て。こーちゃんはきつちり可愛い女の子よ？ 私より

可愛いぐらい」

にやりと音が聞こえそうな笑みは、彼が思つてゐる彼女ではなかつた。

「あら、楽しそうじやない？ 彼女とデートかしら」

声とともに鏡に映つたのは、ラテックスのコートを纏つた彼女だった。

「……もしもし？」

「夕顔瀬か？不來方だ悪かったなこんなマネをして」

「不來方さんもぐるだつたんですか？こんなことをしてどうするつもりなんですか？」

電話口の不來方は少し黙ってから語り出した。

「このセンターがうちの会社の切り札として使われていることは知っているだろ？」

聞いたことがあった郊外にあるこのデータセンターは設備費が非常に安いだけでなく、

運用費も安く確実な運用を行ってくれるらしいと。

「郊外に設置することで設備費を下げるだけでは競争力がない確實なオペレーションを安く行う必要がある」

「それとこれとは何が関係があるってですか？」

「技術的な素地があつて長時間働ける人材は意外といない。これまでの夕顔瀬の仕事ぶりで適合することがわかつたのでお前にはこのセンターに三年間出向という形でこの会社に転籍して貰う。三年間働けば今の会社にもどれることになる」

「断つたらどうなるんですか」

断れる状況でないことは夕顔瀬にはわかつたが聞かずにはいられなかつた。

「その部屋の中でよく考えてみるだな。それでも駄目なら自主都合退社だ」

さらなる疑問を投げかける前に不來方からの電話は切れ、遠くに響くサーバルームの空調機の音だけが聞こえていた。

間に合うと間に合わないの間

春屋アロヅ

転落、と見た瞬間に調子に乗ってステージから落っこちる図が浮かんで離れなくなりました。

<http://third.system.cx/>

川鶴鶏助

お題をもらったときにはかなり悩みましたが、過去の転落に関係する話を書くことに。おかげで随分昔に張った伏線をようやく回収できました。

Fukapon

悪化してる……。元気にやってるだけで満点もらえそうなほど……。今年はがんばると言って10ヶ月、今年が始まってないよ！ で、でもまだ2ヶ月あるからね、がんばるよ、うん。

<http://www.fukapon.com/>

なぎ

今回締め切り前日まで岩手・青森への旅行中で泊まっているホテルに考えておりました。モチーフはタイトルの通りですが、もう少し整理して書き直したいですね。四月から転職してデータセンターと関係の無い仕事なのですがやっぱりデータセンターが好きだなど気づきました。

レイアウト

機材の更新を見送っている理由が理由なので、次回ちょっと不安だけど。身体動く限りやりたいよね。

<http://www.projectkaigo.org/>

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 12
転落

2013年11月3日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2013 川鵜鶴肋, 春屋アロヅ, Fukapon, なぎ, まにふいくみやはか
この本は Creative Commons Attribution 3.0 Unported License に従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/> をご覧ください。

mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしております。
作品がいただけないと休刊です。

家路

がテーマの作品を募集中。ジャンル問わず
締切は発行当日00時 (+2時間ぐらい)
コピー一本だからさ、軽いノリで

Next Issue in May 2014
<http://www.projectkaigo.org/>

おうちに帰るまでがイベントです。それではみなさま、ご安全に!